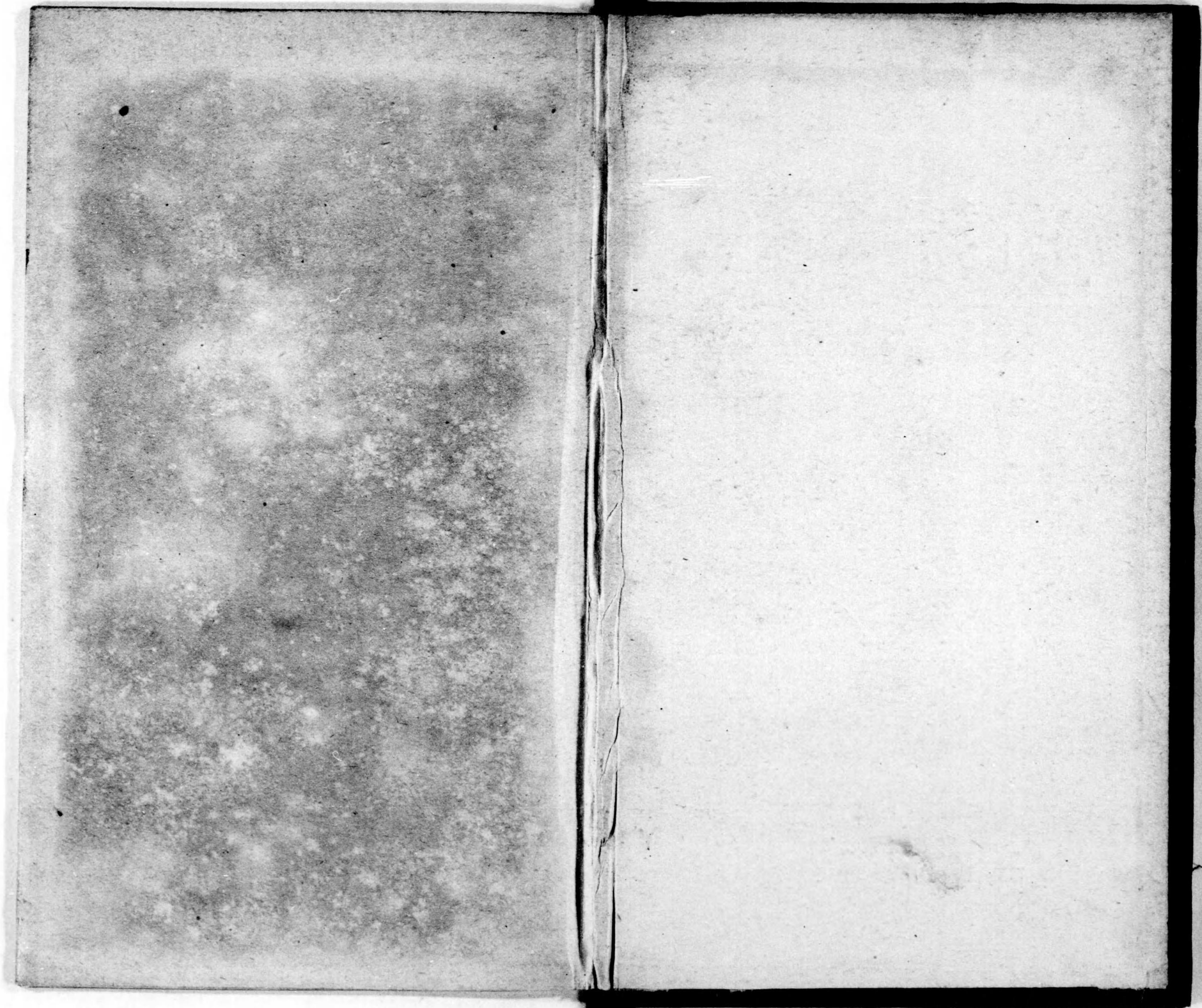


始





特103
539



赤
穂
義
士

河合小鴉著



大正
9. 7. 13
内交

はしがき

佳有ありと雖も食はざれば其の味を知らずとは、忠臣蔵浄瑠璃本の書き出して皆
さま疾に御存知の名句。まことや讀んで見た上でなければ、その本の面白さはわか
らぬ。赤穂義士の讀み本も澤山にあるが、さて、手頃の一部にまとまつたものと云
つたら、有るやうで無いおもしろの世の中、娘がしてくれた用意の搦り飯を腰につ
けて、與一兵衛もどきに探し廻らすとも、山科の閑居に晝寝して、由良さん此方、
手の鳴る方への夢でも見、酔さめのお冷水一ぱいグツとあふり、手を伸ばせば直ちに
得らるゝ此の珍本、お値段も高くはなし、それに第一、誰にもわかり易く、おもし
はしがき

赤穂義士

ろく書いてあるのが何よりな。この忙しい現代に、七むづかしい文字の研究からしてかゝられば意味をとることが出来るやうな本はお求めになる手間も御損や。大高君の文句ぢやなければ、さゝ召しませ〜この本をと。云爾。

大正九年六月

佳水通史

目次

發端	一
松の廊下の刃傷	三四
田村邸の切腹	四四
三番早打	六〇
赤穂城中大評定	七一
山科の浪宅	一三三
連判狀破り	一三三
南部坂雪の別れ	一六六
神崎與五郎の一節	二〇〇

横川勘平の苦忠	三〇
義士の苦節	三四
義士の勢揃ひ	三〇一
吉良邸討入	三三二
小坊主新齋の事	三三〇
突撃奮闘	三四〇
大石主税の器量	三七六
義士の引揚	四〇〇
焼香の悽愴	四四四
驚天動地の自訴	四三一
義士の切腹	四六三

赤穂義士

河合小鴉著

發端

徳川氏が天下の權を握つてから茲に五代、世は漸く泰平に馴れて驕奢に耽る元祿の天地となり、遊惰に流れて安眠を貪る民は浮いたく、其日を送る最中に、突如として青天の霹靂とも云ふべき、上下を震駭せしめたるは赤穂浪人の義舉であつた。

發端

此の壯舉は實に日本魂の發揮、武士道の華とも云ふべきであつて、萬松山泉岳寺の山腹潮風に嘯く老松の下、四十餘基の墳墓を並べて、永へに眠れる英靈は、萬世不朽に其の潔さを語つてゐる。

播州赤穂城主淺野内匠頭の先祖は淺野彌兵衛長政である。長政に三人の子があつて嫡男は紀伊守幸長、次男は但馬守長晟、三男采女正長重と云ふ。彼の關ヶ原の役には長政幸長父子相次いで徳川家に屬して大功を樹て安藝備前兩國に於て四十二萬二千石に封ぜられ廣島に城を築いた。然るに紀伊守幸長に世嗣の無かつた爲但馬守長晟が名跡を継ぎ、三男采女正長重は分家して二代將軍秀忠に仕へ、大阪兩度の戦に功を樹て、元和六年に常陸國笠間に於て五萬三千石を宛行はれた。寛永九年に長重卒去せしを以て嫡子内匠頭長直其跡を襲ひ、正保二年播磨へ國替へとなつて赤穂加西・加東・佐用の四郡に於て五萬三千石を領した。寛永十三年長直卒して嫡子采女

正長友が赤穂三代の主として領内を治めたが、延寶三年逝去せし爲め、當時九歳の嫡子又一郎が家督を相続し、十五歳の時初めて將軍家へ拜調を賜はり、即日從五位上に叙せられ、朝散大夫に任じ、内匠頭長矩と名乗つた。

一方吉良家の祖先は清和源氏の系統で、八幡太郎義家の末孫、足利時代には最も名聲の高かつた吉良氏の末であるから、家柄と云ひ身分と云ひ、旗本の名はあれど高家と稱して公武の間に立入り、最も優しき宮中の式作法を穢汚けき東夷に傳授すると云ふ役目、祿は少なくとも位は高く、殊に從四位少將高家の筆頭である。のみならず十五萬石上杉家の當主には實父に當る處から、大した勢力があつた。大體此吉良上野介は業慾非道の性質で、何で淺野内匠頭と葛藤を生じたかと云ふと、人間には相縁奇縁があつて、佛説に唱ふ因縁、俗に云ふ仇敵同志に生れ出たのであらう。

内匠頭が未だ又一郎の昔、十五歳の初登城の節、將軍家のお目見得も滞りなく濟んで、御後見役加藤遠江守に連れられて高家部屋へ行くと、其處には五六人の高家方が控へて居た。

「エ、御一同様、これは故淺野采女正長友殿の御子息又一郎殿、今日初登城仰せ附けられ、首尾よく將軍家お目見得も相濟み、以後内匠頭長矩と名乗られまする故、何卒お見識り置かれまするやう願ひ上げまする」と云つて遠江守が紹介せたと、高家の人々は口を揃へて。

「左様でござるか、何卒以後御別懇に願ひたい」と相應の挨拶をする。遠江守は長矩を連れて其場を去らうとする時、中に一人振り返りながら大口開いて冷笑ひ。

「あは、彼れが淺野の俸か、父親の長友も疋癩持ちだつたが、彼の俸も額に青筋が出て眼の工合、口の按排、恚うまで短氣な相貌が似て居るとは實に不思議だ。蛙

の子は矢張り蛙だ、あは、と云つた者がある。

性來短慮の長短は、此一語を聞くとグツと胸に込上けたが、思ひ返して「遠江殿、唯今何事か拙者の事を云はれたが、彼れは高家の何と云ふ人でござる」と問うた。

「イヤ左様な事をお心に掛けられな。高家衆などと云ふものは、位が高いに慢じて諸侯などは何とも思はん、得て恚う云ふ事を云ひたがるもの故、決してお氣にさへられな」

「イエ却々意に留るなぞと左様な事はござらぬが、彼の人は何と云ふ人でござる」
「彼れは高家の筆頭吉良上野介、傍に居られたは品川豊後守でござる」

「ハ、ア左様でございまするか」と云つたが、怨めし氣に振り返りながら此場を立去つた。内匠頭が吉良を怨むと云ふ原因は既に此時より萌したのであつた。
それから遠江守の案内で部屋々々を廻り終つて、内匠頭は鐵砲洲の上屋敷へ立歸

つたが、殿中で蛙と呼ばれたのが如何にも心外で堪らず、鬱々として一日を過した。それからと云ふもの吉良とも同じ殿中に出仕するのであつたが、格も異ひ役向も違ふので顔を合はす事も稀であつた。けれど時として對面する場合は、内匠頭は何となく不快の色を面に現はして居た。

長矩は追々成長するに従ひ、文武の道を鍛錬したが、性來懶惰の質ゆる遂に兩道に通じ天晴の技倆を備へた、只惜しい哉疳癖が強く、全く是は吉良の言ふ如く親譲りであつたかも知れぬ。

元祿時代には、太平が打續いた故か文學が盛んに行はれ、従つて風流の道も數行はれる中に、諸侯に茶の湯が大流行をした。其中でも斯道に堪能と云はれたのは淺野内匠頭、木下肥後守、内田備前守等であつた。然るに元祿十一年九月中旬、麻布市兵衛町の木下肥後守の邸宅に於て茶會が催さ

れた。客として招かれたは吉良、淺野の外に織田和泉守、土井大炊守、中川修理太夫などであつた。吉良は千家の家元で、五代將軍に茶の湯の指南をしてお覺えの芽出度い者、それ等の點から自然と權柄がある。且つは性來驕慢で何事にも自慢をしたが、癖があるから、雑談の末に

「イヤ各々に少しく珍説をお話し申さうか」

「何事でごさる」と織田和泉守が吉良を見返ると、

「是非お伺ひ申したい」と中川修理も合槌を打つ。

「然らばお話し申さう、手前知行所下總に稻葉の郷と申す所がござる。其處には千八百石の知行がござるが、餘程以前の事であつたとか、雪中に母子の順禮が通り掛つた處、母親の順禮が持病の瘰癧氣に閉ぢられ打倒れて苦しみ出した。娘は途方に暮れて涙片手に介抱する中に、母親は遂に其曉方息絶えた。娘は悲嘆の餘り母親の死

骸に取縋つて前後不覺に泣き崩れて居るを、村の百姓共が認めて如何にも不惑に存じ、種々慰めたが娘は背かずして、母親の死骸に縋りついた儘二日二晩泣き暮し、遂々相果てたとは實に珍らしき孝行者ではござらぬか。依つて母子の死骸は其儘離さず其處に埋め、其上に小松を二本植ゑたと申すこと、然るに年経るに従つて其松が成長し、此頃に至つて母の松が倒れんと致したを、娘の松が支へる形になつて來た。餘りに不思議の事で、死んで迄孝行の心が顯はれるといふは多く得難き奇蹟である故、是に碑を建て、遣はしたいと存じ、其碑文を拙者詠んでござる」と吉良は鼻齧かして物語つた。

この長物語を聞いた一同は、最初孝子の話かと思つたが、實は自分の歌の自慢と知れたので、聊か拍子抜けの形である。

「それは好い事をなされた。世にも優しき思召、定めし御名吟でござらう、願くば

承はりたう存する」和泉守が引取つて慫う云つた。

「イヤもう取急ぎましたので、甚だ不出來でござるがお聞き下されい。(心ある人に見せばや下野の稻葉の里の親抱きの松)と斯様でござる」

「イヤ成程、實に結構々々」と一同は義理合に賞めた。

内匠頭は苦々しき顔で「失禮ながら後世不孝者の意見の引事にも残さうといふお話の模様でございましたが、心ある人ならば君には忠、親には孝、朋友には信を盡す事は心得て居りさうなもの。されば此御歌は、心ある人には見せるに及ばぬ儀でござらう、これは上の五文字を心無きとお改めなされたら如何、西行法師の歌にも(心無き身にも哀れは知られけり鳴立澤の秋の夕暮)とあるに依つて、是非心無きとお改めがお宜しい」と口では優しく云つて居るが、心の底には蛙の返報といふ覺悟がある。

「イヤ成程、然う承はつて見れば其の方が宜しい」と中川修理が頷いた。
 「内匠殿は御若年ではあるが、歌道のお嗜みは深うござる」と織田も相槌を打つ。
 「これは内匠殿仰せの通り、心無きとお改めなされた方が宜しい」と土井大炊守は
 吉良をチロリと見たが「イヤ内匠殿の御一言誠に恐れ入つた」と長矩を褒めちぎつ
 た。内匠頭は是で幾分腹癒せが出来たと思つたが、吉良は散々にたしなめられて、
 燃ゆるが如き憤怒を耐えて居るから、其形相恐ろしく、一座は爲に白けた。
 抑も吉良淺野が非常の確執を生じ、遂に刃傷とまでなつたも、初めは蛙の悪口が
 原因で第二の憤怒を買つた、是等が即ち意恨確執の端緒とも云ふのであらう。
 慥う云ふ風に原因は種々あるが、今一つは縁談の事であつて、吉良が自分の俸に
 貰ひ受けよりの思つた娘を、内匠頭が娶つて終つた。これが芝居する顔世御前：
 ……それ等の意恨もあつたと云ふ。

兎も角此上野介は慾心満々として唯々金銭にのみ眼を呉れ、當時流行とは云ひな
 がら公私の事總て賄賂に依つて左右した爲に、随分諸大名方に嫌憎されて居たが、
 と云つて諸侯が此吉良をば何うしても頼りにせねばならぬ事がある。それは高家の
 師匠番であるから、總ての式作法を彼れに傳授されねばならぬ。上野介は是を良い
 事にして賄賂を貪る、それ故已を得ず諸侯が多く贈物をして上野介の歡心を買ふ
 に努めると云ふ有様。
 吉良上野介が餘りに遣り過ぎた爲に失敗した例がある。泉州岸和田の城主岡部美
 濃守が、或時日光御社參の御代拜を仰せ附けられた事がある。是とて吉良の師範を
 受けねばならぬので、賄賂を送つた處が妙なかつた爲に敗々な目に遭ひ、辛うじて
 お役を勤め終ほせたが、残念の餘り家督を譲つて自ら對馬軒と名乗り、隱居をして
 青山に別莊を作り、此處へ吉良を誘き寄せて刺殺さうとした。此時吉良は疊へ兩手

を突き、只謝りに詫びて命からん、逃歸つた事がある。

その後石州津和野の城主龜井能登守が、元禄十二年に天葵野の役を仰せ附けられた。此時も贈物の少なかつた爲に、能登守は濫りに悪口された、のみならず祿盗人とまで云はれた。流石我慢強い能登守も「ウム……」と云つて思はずも小刀へ手を掛けた。が「イヤ待て暫時、東照宮御遺言の御條目中に、殿中にて宿意を以て白刃を揮ひし者は、拔群の家柄たりとも其身は切腹、家名斷絶とある。今短氣を出して吉良を斬捨てるは易いが、さすれば家來共に難儀を掛ける次第、又先祖へ對して申譯がない、茲が堪忍の仕處だ」と成らぬ堪忍をして退出し、我が邸へ歸ると「外記を呼べ」と激しき吩咐。

多湖外記といふのは城代家老であるが、能登守が此度の大役に就て、相談對手として江戸表へ出府して居た頗るの才物「ハ、ッ、今日は御用滞りなく相濟み御退出

懇悦を申上げまする」

「ウム外記、其方へ改めて些と申聞ける儀がある。近ふ進め、餘の者は暫時遠慮致せ」と近臣を立たせた能登守、ヂツと外記の顔を見詰めて「外記、其方は余に諫言を致すか何うちや、先づ其れを聞きたい。諫むると云へば何事も云はずに覺悟を致す、諫めぬと申さば余の存じ寄りを申聞けるが何うちや」

恚う云はれては外記も返答に困る。轟く胸を押へながら「異なお言葉を承はります。何事かは存じませぬが、先づお明しを願ひたう存じます。お宜しい事であればお勧め申します。又お悪い事であればお諫め申すの外はござりませぬ」と云つて主人の顔色を窺つた。

「イヤもう可い。其方は余に諫言をする氣ぢやな、それならば何も言はぬ。余は覺悟を致した。退れ」

「ハ、ツ……」外記が能登守の顔を見上げると、眼は血走つて殺氣が溢れて居る。
 「エ、此度の御大役に就て、私は遙々石州より出府致し、萬事御内密の御相談對手
 を仰せ附けられました者、何事が變事出来いたしませうとも、一應はお話し下さら
 ねば相成りませぬ。宜しう御座います、それでは何事にもあれ決してお諫めは申
 させぬ、何卒お覺悟の程を仰せ聞けられ下さります様」
 「然らば金打いたせ」と能登守は踊り出る。
 「ハ、ツ、心得ました」と、外記は差添への小刀で金打をした。
 「イヤそれで宜い、別儀でないが豫々其方にも聞けたる通り上野介が無禮、今日と
 ても諸侯の居流れたる面前で祿盗人と云はれた。最早堪忍は致されぬ、其場を去ら
 ず一刀の下に斬つて捨てやうとは思つたなれども、彼れを殺さば余は切腹、家名は
 斷絶と相成る。余の亡き跡に家臣共心得違ひを致し、公儀に弓彎くやうな事あつて

は相成らんと存じ、其方に後事を托さんと思ひ忍び難き處を忍んで立歸つたが、明
 日はもう宥さぬ。出合ひ次第に眞二つに返し返す刀で切腹する。其方は軍用金を家
 中一同へ分與へて津和野城は公儀へ禮を厚く致して明渡すやう取計らひ呉れよ、余
 の心は鐵石の如くである」と云つてハラ／＼と涙を零した。
 多湖外記は喫驚したが、大才物であるから色にも出さず「ハツ、能くこそ御堪辨
 なされてお立歸り遊ばされました。それを承はつて何しに御諫言を申上げませう、
 何卒明日は立派に武士道をお立て遊ばします様に、忠孝二つながら全からずとは
 古人の金言、御當家御先祖様には御不孝に御座りまするが、武士道の恥辱已むを得
 ず斬つて捨てたとなれば、冥土に在す御先祖様もお許し下さいませう。何卒明日は
 吉良上野介を斬つて捨て、御遺恨の残らぬ様に遊ばされませ」
 「イヤ能く申した、誠に喜ばしい」と能登守は莞爾して其場を立つた。

外記は兩腕を組んで暫時考へに耽つたが、偶と心付いて夜中をも厭はず多くの金品を携へ、吉良の屋敷へ行つて之れを贈つた爲に上野介は打悦び、其翌日は打つて變つて手を執るやうに能登守を教へ導いた。その爲能登守も斬らうとして斬る機会が無かつたと云ふ。

斯る例のある吉良であるから、元祿十四年に内匠頭が勅使豊應の役を仰せ附けられた時に贈物が少なかつたのみならず、前々からの意恨を晴らすは此時と、吉良が腕に燃を掛けて待ち構へたのであつた。

浅野家と共に此豊應の役を仰せ附かつたのは伊豫守和島伊達家の支藩、同國吉田の城主三萬石、伊達左京亮宗春である。老中からの達しは、萬事は吉良上野介の指圖を仰けとあるので、伊達家は左京亮自身吉良邸へ立越え、叮嚀に挨拶をして頼み置き、翌日家來を以て莫大な贈物をした。

然るに浅野家でも一同評議を凝し、何うしたものかと相談の時に、江戸家老安井彦右衛門は至つて吝嗇の性質であるから、

「上野介は我々に指圖する其れが役目であるから、其職に依つて師範をするのだ、其爲めに四千五百石の祿を取つて居るものであるから、別段に當家よりして上野介に贈物をするには及ばん」と云つた。

堀部安兵衛が其れを遮つて、伊達家の振合を問合せて、當家も其れに準じて贈物をした方が可いと忠告すると、安井は何うしても其れを肯入れなかつた。大體此彦右衛門は聚斂の臣と云ふではなけれど、只吝嗇にして我意が強かつた。其爲か扇子箱一臺蒸菓子一臺を贈つた。

上野介は伊達家の贈物と比べて非常に憤懣し、内匠頭を苛めて呉れやうと待構へて居る内に、愈々元祿十四年三月となつた。十一日には江戸お着と云ふので勅使高

野中納言保春卿、院使柳原大納言賢康卿、今一人は清閑寺中納言照定卿が滞りなく龍口天葵屋敷へ入られ、翌早朝に御登城、それより上野寛永寺・芝増上寺へ御参詣、

十三日は御三卿共城中にて能樂拜見、十四日は愈々饗應と云ふ順序である。

此間に於て色々に淺野は苛められたのだが、他で見る目も誠に氣の毒な有様、然るに一方伊達家は萬事萬端行届いて居るから、大層賞め者になつてゐた。

今日は十二日、内匠頭は支度萬端整へて芝三線山増上寺の詰所で、伊達侯と共に三卿の來られるのを待つて居る。所へ上野介がツカ／＼と入つて來た。

「ヤア御一統、もう程無く勅使院使の御同勢がお出でに相成るでござらうから、御料理其他のお仕度お手ぬかりもござるまいが、上野一應内見致すで御座らう」と云つてムズと上座に坐つた。

伊達左京亮は慇懃に兩手を突き「これは上野殿には御苦勞千萬に存じまする、未

熱ながら御料理の獻立、お座敷の模様等御點檢を願ひまする」

「イヤ伊達侯の事なれば御如才はあるまいと存するが、師範役の事なれば一應拜見いたすでござらう、失禮御免下され」と、上野介は立つて懷中より手拭を取出し、

口を結へて御料理を見渡した。「ハア／＼伊達殿の御手配流石は美事々々、失禮ながら能く出來ました、併し淺野の方は何うなつて居るか、心掛りであるから巡見いた

すでござらう」と、其儘次の室へ行く。内匠頭は吉良の後より續いて自分の受持の部屋へ入つた。

「今日は御師範役には御苦勞千萬に存じまする。お座敷のお飾付け、其他お料理の獻立等お見届け下し置かれたく存じまする」

「イヤ勿論の事でござる、見届けるは拙者の役でござるから檢分致すであらう」と左も惡體に云ひ放つた。吉良の心中では、伊達と違つて淺野へは何も教へずにあつ

たから、定めて手筈も違つたらう、準備も行届かなかつたらうから、何か落度を見付けて充分に懲しめてやらうと四邊を見廻すと、座敷の掃除其他も充分に行届いて御料理の献立なども伊達家よりは立派な器など用てあるから、上野介不審に思ひながらも「イヤ内匠殿、是は何事でございます、一切魚類を以て料理いたされたな、今日御場所を何とお心得ある。三縁山増上寺御参詣の折は、お精進を以て饗應申上けるのが例年の格式でございます。此處を何處と思はるゝぞ、將軍家御代々々の御靈屋のある大堂伽藍、三縁山増上寺の御宿坊ではござらぬか、何故あつて魚類をお用るに相成つた、御精進と云ふぐらゐるは分りさうなものではござらんか、斯様な魚類にては役に立たん。早々精進物と差替へられて宜しからう、何と云ふ事だ斯様な事のない様に最初より上野が指圖を細々お受けなされば宜いに、盡く獨斷でなさるから斯様な急場に至つて困るのでござる。それに又云ひたくないが、壁の塗方にしろ障

子の貼方にしろ、餘り粗末ではござらんか。其他疊の手入と云ひ一つとして見る所の無い疎忽千萬のものでござる。コレ内匠殿、今少し金銭を厭はず手を盡して御奉公さつしやい、斯様な不手廻しでは饗應使たる内匠殿の恥辱のみに止まらん、師匠番たる拙者の不名譽、延いては又將軍家の御恥辱に相成る。されば御手前は將軍家に對して不忠と申すもの、斯様に狼狽召さる様では到底饗應使如き大役はお身には勤まるまいから、早速御免願ひを致されて宜しからう。實に何と云ふ呆痴た事だ」と嚙んで吐出すやうに云つた。

「上野殿暫らくお控へ下さい、左様な事仰せられますが、當方よりは數々お指圖を仰ぐと雖も、御用繁多にてお指圖是なしと家來の者立歸つての物語に大に當惑仕り、其後兩三度お問合せ致したれど、何時も御用繁多なりとて一向にお指圖なく、依つて據なくお料理二通り調進いたし置きました、是を御覽下さりませ」と、内

匠頭は傍の襖を引開けた。

「ヤツ何ぢや、精進魚類二通りの献立をせられたな……サテ／＼無益の金銭を費やさるゝものではあるわい。斯う云ふ事の無いやうに、上野が種々心配いたしてお指圖申しても、勤向きを疎かに致して居らるゝから、肝腎の御役目の時に落度がござるのだ。以後は少し心を入れてお勤めなされい……内匠殿未だ御用は口許だぞよ、是から先きが何のやうに氣が疲れるか知れん。併し慥んな役に立たざる者が五萬三千石とは高い、イヤお腹立ち召さるな……是でも五萬三千石柳の間諸侯とは請取り兼ねる人間だわい、アツハツハ、」と上野介席を蹴立て、奥の間に入つて行く。

内匠頭はカツとして「吾が面前に於て祿盗人と云はぬばかりの悪口、もう堪忍も是れまで……彼れを斬つて我が身も共に……」と思はず手を掛けた刀の橋、チリチリと進んで上野介を追はうとした。

此時隣室に居た伊達左京亮、内匠頭の様子を見て驚き「内匠殿々々、何うした事でござる。御場所柄でござるぞ」と注意した。ハツと思つた内匠頭左京亮に一禮して込み上げる胸をジツと押へた。

其中に御三卿も御入來と成り、増上寺御參詣も滞りなく濟んで、それより宿坊に於て御夕餐の饗應があり、是も無事に濟んで御歸館と成つた。

内匠頭は如何に疝癰強き人とは云ひながら、決して狂人ではなかつた。家を大事、君に忠、臣下一同の者を憐れむと云ふ情は人一倍深い感情を持つて居た。されど吉良上野が度々の無禮、のみならず満座の中で悪態を吐き、耻辱を加ふると云ふは堪忍なり兼ねる、それを凝と耐えて増上寺より歸邸の後も、鬱々怏々として居た。

一方吉良は、淺野にあゝまで云つた言葉の謎、兎に角解けたに違ひない、然らば遅くも今夜中に何か徴がなければならぬ筈と、贈物の來るのを待つて居た。

「御前、淺野家からお使者が参りました」と、家來の左右田孫兵衛が顔を出した。
「ホ、ウ、淺野から参つたか、何か持つて参つたらうな」と上野介は慾深き首を長くする。

「イエ何も持つては参りません」

「ウム、何も持つては参らん、シテ何用得参つたのぢや」

「明日の服装は如何との問合せでございます」

「明日の服装……ハ、馬鹿者奴が、明日は大紋立烏帽子だと斯う云へ」と云つて横を向いてペロリ長い舌を出した。

「承知致しました」と、孫兵衛は其場を立つた。

上野介は後見送つて、サテ／＼吝嗇の馬鹿大名であるわい、何ともハヤ警へやうのない奴だ、ヨシ其儀なら明日は思ふ様窘めてやらうと其れから種々に思案を廻ら

して居た。

翌朝になると内匠頭は、未だ薄暗い中に床を離れ、朝飯を済まして後お納戸から新調の大紋立烏帽子を取出させ、充分に身を清めて悉かり身支度をした。處へ大高源吾が慌しく出仕した、

「御前様暫時お待ち下さいまし、恐れながら御師範役吉良殿の御指圖とは云ひながら、今日の御服装は某誠に其意を得ませぬ、唯今御同役伊達左京亮殿御出仕相成りまする處を私下馬先に於て拜見致しましたるに、長上下の様子でございます。然るに御前様には大紋立烏帽子を御着用とは、某不思議の至りに存じまする」と云つて内匠頭を見上げて居る。

「あ、左様か、併し師匠番吉良殿の指圖であるから、私に着替へ致す譯にもなるまい。然らば斯様いたさう、予は此儘にて登城致し、別に家來共に申付け、密かに長

上下の用意を致して参らう」と内匠頭は大高を見て莞爾した。

「昨日の御料理の例に倣つて、二通り御召物を御持参相成りますれば、萬一の時に
お差支へ御座いますまい」

主従が打合せて、内匠頭は駕籠で本丸へ登城した。

御玄關へ掛ると、其處へバラ／＼と飛んで来たのはお坊主の關休和。

「恐れながら鐵砲洲様、暫時お待ち下さいまし」

振返つた内匠頭「ウム、其方は休和か」

「暫時お控へを願ひます」

「何ぢや休和」

「恐れながら今日は、お服が違ひは致しませぬか。御前様には大紋立烏帽子を御着用相成りまするが、今日はお長上下であらうかと存じまする」

「左様か、御同役伊達左京亮殿は最早参られたか……」

「もう先刻御出仕でござりまする」

「お服は……」

「矢張りお長上下で……」

「左様か、實は拙者も大紋着用とは變と思つたが、吉良殿のお指圖であるから着用致して参つたのぢやが、實は長上下の用意は内々致してあるから、然らば休和一寸着替へる事に致さう、能く注意致して呉れた」

「左様なれば此方へお通り願ひたう存じます」と、休和は内匠頭を一室へ導いて、
盡く衣類を改めさせた。

内匠頭は是から柳の間へ案内せられてイト安堵の面持。

「休和大儀であつたるぞ、其方が早く申して呉れねば此内匠、大なる耻辱を受くる

處であつた」と悦びの顔。

「恐れ入り奉ります」と云つて休和もイソ／＼と退いた。

處へ入つて来たのは上野介、見ると内匠頭が長上下で端然と座して居るから、案に相違の面付で横を向いた。

「これは／＼上野介殿にはお早い御出仕、御苦勞千萬に存じまする」と長矩は叮嚀な挨拶。

「ヤ内匠殿、何をして御座つた。左京亮殿は最前より登城致されて、御用の節を承はつて居らるゝに、御自分は何をしてござつたのだ」と吉良の聲は尖つて居る。

「唯今御休息の間で、一寸着替へを仕つて居りました故に、遅刻致しましてござりまする」

「御着替へとは……」

「着替へとは餘の儀ではござらん、昨夜家來を以て貴殿方へ今日の服装お問合せ致せし處、大紋立烏帽子にて出仕せよとの御返事、然るに家來共の中に於て、大紋立烏帽子は間違ひてあらう、今日は長上下を召されるが古例ならんと申す者あり、某も少しく心に落入らざる處もこれありし故、長上下をも用意の上登城いたし、唯今坊主共より注意を受け、一寸着替へを致しまして御座りまする」

「ハ、ア左様でござつたか、流石は富貴内福の聞えある内匠殿、實に大したもので御座る。昨日は精進魚類兩様の御獻立、今日は大紋立烏帽子長上下二通りの御用意イヤ御念の入つた事でござる。併し何者がお服違ひと云ふ事を申されたな」

「左ればでござる、拙者家來大高源吾と申します者、内匠が勤役中何かと心配いたし、御同役左京亮殿に御服装なぞ其れとなく伺ひまして、立歸つて拙者に忠告致しましたるから、兩様に用意を致して参りました」

「ハテ内匠殿、これは異な事を承はるものでござる。然らば某が何か貴殿に怨あつて、態と間違つたるお指圖を致したと申されるのでござるか」

「イヤ然う云ふ譯ではござりません」

「然う云ふ譯でない」と云つて、唯今何と云はれた、何か意味有り氣に申されたでなにか、拙者に於ては毛頭貴殿を欺いた覚えはござらん」

「イエ決して其許様のお指圖違ひとは申しません」

「知れた事だ、指圖違ひなど、途方も無い事を云はれては誠に迷惑千萬、拙者のお指圖申したのは大紋立烏帽子ではないと申したのだ、大紋立烏帽子でなければ長上下に極つて居るではないか。それに何ぞや稍もすると恨みがましい眼付をして、拙者をチロ／＼と睨め付けらるゝが、何もそんなに拙者を怨まるゝには當らない、何だ其顔付は、全で蛙の化物だ、眼ばかりキヨロつかせて……」と、上野介は思ふ様

に毒言を放つ。内匠頭は込上ける疳癩をグツと耐えて下俯向いて居る。

「ハ、見れば見る程馬鹿氣た顔付、恁んな者に構はぬが第一、鶴龜々々」と嘲笑ひながら立上つた上野介、フンと又顔で笑つて其場を立去つた。

耐え兼ねたる内匠頭、思はず涙を呑込んで、又しても祿盗人と云はぬばかりの罵言讒謗、最早家の大事も家來の不憚も思つて居る場合でない……とアワヤ大事と見えた。此時、加藤遠江守がツカ／＼と立出で、内匠頭を種々に宥めて事無きを得た。で、内匠頭は此日も辛うじて御役を勤め、鐵砲洲の屋敷へ歸ると一室へ入られたが餘程無念であつたか頭髪は逆立ち、兩眼は血走り、兩腕を組んで夜の更けるのも知らず、何か頻りに考へに耽つた。

と、此時忍び足に來掛る者がある。内匠頭は窃と枕刀を取寄せて身構へした。

「何者ぢや」

「ハ、ッ、お目覚めでございまするか。恐れ入り奉りまする、神崎與五郎にござい
ます」

「オウ與五郎か」内匠頭は刀を下へ置き「夜中何等の用事あつて参つた」

「御免……」と云つて與五郎は襖を開けた。

「エ、夜中罷出でましたは與五郎奴が願ひがございます、何卒私にお暇を下し
置かれまする様に」

「ナニ暇を呉れ……」

「ハイ」

「何で左様な事を申す」内匠頭は凝と其面を見詰めた。

「申上げねば叶はぬ儀で御座いますれば申上げ奉りまするが、此度鑿應使の御大役
に就て、お仲悪き吉良殿がお師匠番であらせられまする故、何かお手違ひでもあり

はせぬかと、小臣の心一日も休まる日とてございませぬ。今日に至り御氣色も普な
らぬ御様子、私密かに様子を探りましたる處、吉良殿が萬事に意地悪のみを致され
る由、愈々明日は大切なる御日柄、明日一日が大事と心得、それ故今晚人知れずお
居間へ忍び入り、お暇を頂戴して浮浪の人間と成り、下郎匹夫に姿を變へ吉良殿の
隙を窺ひ、明早朝は必ず御首を申受け、其場を去らず切腹して相果てまする心底、
左すれば御殿様も御心置きなく充分にお勤め續きも出来まする事と心得ます。何卒
お暇状を只今頂戴致し、主従の御縁をお切り下さいまする様」と、後は涙に呉れて
居る。内匠頭は差俯向いて言葉もなく、暫時涙に呉れて居たが、聽て顔を上げ與五
郎の手を取り押戴き、

「こりや與五郎、過分なるぞよ。家來とは思はん、肉身分けし兄弟の如く思ふぞ。
其方が其れ迄に不肖なる内匠を思ひ呉るゝとは、嬉しいぞや辱ないぞや、併し其心

配なれば無用に致せ、何事も夢と諦めて萬事に留めず、譬へ上野介に泥脛をもつて踏まれようと、頭を叩かれやうと堪忍の上にも堪忍して、決して短氣は致さんぞ。斯程誠忠なる汝に暇を遣はしては内匠頭が第一の耻辱、もうく短氣は致さんから安心して居間へ退つたが宜い』

「有難き其お言葉、然らば殿様には何の様な事が出来ましても、御短氣はなさりませぬか」

「素よりである、念を押すに及ばん、安心して退出いたせ」

「有難う存じまする、では私は詰所へ退ります」と、奥五郎が頭を撞けると、思はず見合はす顔と顔、主従共に顔を反向けて霎時暗涙に咽んだ。

松の廊下の刃傷

元禄十四年三月十四日は、五代將軍綱吉公御勅答の當日、終つて殿中大廣間に於て勅使饗應と云ふのであるから、誠に大切なる日柄である。されば饗應使たる浅野・伊達も未明より登城せねばならぬ。

吉良上野介も師匠番であるから、四位の少將の官服に身を纏うて登城した。

「さて左京亮殿、今日は殊の外に御大切なる御日柄、一寸過失がござつても家名に關はる事、依つて詳しく御傳達を申さう」

此席には内匠頭も居合せたから、二人の前で總てを傳達したら宜さうなもの。然るを伊達左京亮を次の間に呼び寄せて耳に口寄せ呟いて傳達をした。

「宜しいか、若又心に落ちん事がござれば、何遍でも高家部屋へお越しあれ、御口達申すでござらう」と大聲に云つて、内匠頭をチロリ横眼に睨んで奥殿へ去らうとした。

「ア上野介殿、内匠頭へも今日の御用御傳達に預りたう御座る」

「イヤ内匠殿、唯今は御用繁多で御座るに依つて、貴殿には後刻御口達致すのでござらう」と上野介は嘲笑つて奥へ入つて了つた。

左京亮は傳達があつたので、サツサと御用を勤めて居る。内匠頭は夢我夢中、相役ゆる左京亮の爲る事を見真似で立働いて居る。

兎角する中に三卿の登城の刻限となつた。此登城前に御老中より高家並びに饗應使に對して御奉書が到來する。是を上野介が一同を集めて拜聴させる。此折にも内匠頭をば呼ばなかつた。

此席へ列したのは上野介を始め品川豊前守、六角近江守、大友越前守(以上高家)伊達左京亮(院使饗應使)の五人で、無論勅使饗應使たる淺野内匠頭をも呼ばねばならぬのだが、吉良は故と内匠頭に知らせなかつた。

品川豊前守は氣の毒に思つて、密と立つて御坊主を呼んで、

「今是从高家部屋で御奉書の拜讀があるから、早速内匠頭に罷出られるやう申せ」と命じた。御坊主は畏まつて是から内匠頭を探しに行つた。

「内匠頭様、唯今高家部屋に於かれまして御奉書の拜讀がござりまするから、早速お出で下さるやうに、品川豊前守様の仰せでござります」と、漸々見付け出して斯う云つた時には、既に刻限も大分経つて居た。

内匠頭は驚いて、遽しく高家部屋へ行くと席が至つて静かである。

「御一同御達しは相濟みましたな、確乎と記憶なされたであらうな」上野介は内匠頭の顔を見ると、故と恚う云つた。「御奉書は至つて緊要なる事のみ記しあり、これを拜讀せざればお役も勤まり兼ねる程、大切の奉書でござるから、左様心得られよ」と、御奉書を巻いて其儘席を立たうとする。

内匠頭は遽しく立止め「御師匠番に願ひます」と席を進め「お達しの趣、内匠に於ては未だ承知仕りません、願はくば拜聴仰せ附けられます様願ひます」

「折角でござるがお断り致す、それにて殿中饗應の大役が勤まらんと思召すなら、御役御免を願つたら宜いではござらんか、大切の御達しがあらうと云ふに、外の部屋をば遊び廻られて居るから取外される。左様な事では此大役は勤まるまいから、早速御免を願はしやつたが宜しからう」

「一々御道理の仰せにはござれど、何卒幾重にも御堪辨下し置かれ、御賢察の上、今一應お達しを願ひたく……」と疊に手を突いて頼む。

「イヤ一切相成らん、成り申さん」

「格別のお慈悲をもちまして、今一度お達しを願ひたう存じます」

「エ、成らんと申すに……」

「寛大のお思召をもちまして……」

「諄いわ、相成らんと申した以上は決して見せる事も聴かせる事も出来ん」と、奉書を巻きながら上野介はツと立つた。内匠頭がチラと見ると、御奉書の端に自分の名があつた。

「御奉書の端に拙者の名前が見える様でございます、若しお見せ下し置かれませぬければ、内匠自身拜見いたします」と、内匠頭思はず、手を伸ばして御奉書を取らうとした。

「ヤア何を爲さる不都合千萬、何と申しても相成らんわい」と、意地悪くも上野介其儘高家部屋を立出でた。

「一々御道理ではございまするが……」と内匠頭、今は泣かんばかりに後を追つて行く。

「御師匠番、何卒拙者を不憚と思召して……」と、幾ら云つても知らぬ顔、後をも見ずして上野介は今松の間の御廊下まで来た。

「上野殿、何卒御奉書拜見仰せ付けられます様……」と、追ひ絶つて右手を伸ばして上野介の右の袖を控へた。

「エ、無禮者奴ツ」と、上野介は持つたる中啓を取直して、振り返りながら内匠頭の横顔をバツと打つたから、内匠が冠つた烏帽子が横に曲つた。上野介は冷笑して其儘行き過ぎんとする。

内匠頭はクワツと逆上した。さてく、非道な奴であるわい、残念千萬、最早御奉書拜見いたさぬ上は、役目の勤まらぬは勿論の事、さすれば五萬三千石は上へ返納せねばならぬ。其上聞くに堪へぬ暴言を吐き、耻辱の上に耻辱を加へられ、今は堪忍袋の緒も切れた、家の事も思つて居られん、猶豫する場合でない、冠つた烏帽子

子の紐をバラリ解いて後へかなぐり棄て、大原真守の小刀に手が掛るとツカくと進み寄り、

「上野待てッ」と大喝一聲。

上野介が思はず後を振り返る途端、抜打にヤツと云つて烏帽子の上から眉間を望んで斬付けたが、刀が烏帽子の鐵輪に當つた爲め、眉間へ僅かの疵を負はせたばかり。元來が小膽の上野介「各々方出で會ひ候らへ、亂心者でござる、内匠頭が拙者へ斬付きました、各々方早くお出で下さい」とブル／＼顫へながら逃げ出す。

「上野卑怯だ、待て」と、猶も内匠頭は追掛けて斬付けようとする。

と、此時次の間に控へて居た梶川與三兵衛、何事ぞと飛出して見ると此騒ぎ、我れを忘れて内匠頭の後から抱止めた。

「誰ぢや、離して呉れ、武士の情けに一太刀恨まして呉れ、離せ、離さぬか」

松の廊下の刃傷

内匠頭は焦つて身を藻掻く。

「内匠殿如何なされたもので御座る。御場所柄でござるぞ」と與三兵衛は力を籠めて抱止める。

「アツ梶川か、武士の情ぢや離せ、一太刀恨ませて呉れ、離さぬか」

「イヤ離すことは相成り申さん、内匠殿亂心めさるな」

今は絶體絶命、大力の梶川に押へられて内匠頭は如何とも詮方なく、身を藻掻きながら五六歩ばかり引摺つて「エツ無念……」と云ひさま、上野介望んで一刀投付けると、上野介の頭上を越して柱に刺さつた。殿中の騒動は一方でない。一同馳集まつて内匠頭を取押へ、一室へと入れて了つた。上野介は右の手で眉間を押へ、左の手をお坊主に引かれて高家部屋へ逃げて行く。

此時播州龍野の城主脇坂淡路守が、内匠頭が刃傷をしたと聞いて、急いで馳來る

處で上野介に出會つた。此淡路守は内匠頭とは交際が厚かつた。それが對手の上野介が逃げて來る處なので、此親爺が存命中は何に就けても諸大名が難澁、内匠頭も此親爺が卑劣の心から此度の大椿事を惹起したに相違ない、侍僥四邊に人は無し……と、突如拳を固めて擦れ違ひさま吉良の横面を力に任して打つた。逃げて來た上野介は足が浮いて居たので、よろ／＼として蹠跟きながらも逃げ出した。で、辛と高家部屋へ引取り、ホツと息を吐いて醫者の診察を受けた。

此騒動の様子が、大手馬先へ聞えると、白河口濠端まで大變な混雜となつた。けれども誰々の刃傷……斬られた者は誰と云ふ事は分らない。只自分達の主人に過ちがないのを祈るばかり、だが浅野のお供頭に立つた茅野三平、速水藤左衛門の兩人は其れと覺つて、只茫然として途方に暮れて了つた。

浅野内匠頭は御徒士目附當番所に押籠められ、白紙貼りの屏風で圍まれ、御小人

松の廊下の刃傷

目附三人に守衛られて居たが、老中方評議の末、家康公の御條目に法つて、芝愛宕下田村右京大夫へお預けと云ふ事になつた。

何にしても内匠頭は狂人でもなければ痴者でもない、殿中に於て鯉口三寸寛ろければ家は改易、其身は切腹と云ふ位は心得て居た。又忍ぶだけは忍ばうと云ふ堪忍もあつたから、前夜神崎與五郎の諫めをも容れたのであるが、最早絶體絶命の場合となり、據なく刃傷とまでなつたので、五萬三千石の天下の諸侯が網乗物に乗せられて城外へ送り出される様に成つたとは、實に傷ましき限りである。此事に就て老中秋元但馬守は、何とかして淺野家の半地なりと取止めたいと、種々心配したが効がなく、遂に内匠頭領地は盡く召上げられると云ふ悲運に立至つたのである。

田村邸の切腹

老中秋元但馬守、稻葉丹後守等の取做も遂に水泡に歸し將軍綱吉の怒り激しく土屋相模守を以て、芝愛宕下の田村右京大夫へお預けとなり、即日切腹仰附けらるゝ事になつた。檢視の役に立つたのは大目附庄田下總守、御目附多門傳八郎、荒木重左衛門である。

これより先殿中の騒動を聞いて供頭に立つた茅野三平、速水藤左衛門は慌て、鐵砲洲の屋敷へ馳歸り、留守居役の堀部彌兵衛に大略を傳へたから、淺野家一同の驚きは一方でない。彌兵衛は片岡源五右衛門と謀つて、何は兎もあれ田村邸へ推参して主君内匠頭に逢はうと評議の所へ、公書を以て内匠頭切腹申附けられる事から、遺骸は舍弟大學へ引渡すと云ふ下知が來た、其處で堀部安兵衛、片岡源五右衛門兩人が大學の名代として田村邸へ罷越し、家老志摩伊織に對面して御遺骸引取りの趣を語つた上、

田村邸の切腹

「吾等歎きのうち、願ひと申すはアワレ家中總名代、且は今生の名残、今一度主人に目通り仕りたく、此儀お取計ひ下されば有難き仕合せに存じ奉ります」と、頭を垂れて折入つての頼み。

暫時考へて居た伊織は、ホツと溜息を吐いて「其儀は相成り申すまじ、内匠殿は公儀よりのお預り人、其方達は罪ある人の家來ゆる對面致させる事は、當家に於て取計ひ難し、此儀はお諦め下さる様」と云ひ難さうに斷つた。

「仰せ御道理にはござれども、主人内匠頭は今日生害、家は斷絶、定めて残り多き事も御座らうと存すれば、切ては其臣として其君に一生の別れ、お面なりとも拜したく、此儀お聞濟み下さるよう、偏へに願ひ上げまする」と

と源五右衛門は双の眼に涙を浮べて云ふ。伊織は其誠忠に感じて、「イヤ天晴れ御忠節感じ入りました、お申し談じの趣至極御道理、此段一應主人

に申聞ける間、暫時お控へ下さるやう」

「咄云つて伊織は其場を立ち、主人田村右京大夫へ物語つた。

「フム、公儀へ對しては恐れ入る事なれど、彼等が心底不憚に思ふゆゑ面會を差許すであらう。然れども書院庭前に控へさせ餘所ながら對面の儀取計らう様いたせ」と、右京大夫も堀部片岡の忠義に感じて差許した。伊織は有難涙に暮れて元の座に返り、

「嗚お待兼ねでござつたらう、主人に申聞けました處、特別の情けを以て御書院庭前にて對面差許すとの事、片岡殿なり堀部殿なり、御一人お出でになり、家中總代とあらば其れとなくお別れを告げられて然るべし」

此言葉に片岡堀部もホツと喜びながら顔見合せたが「片岡殿、御貴殿は御主君へお別れに庭前へお出であれ、拙者是に控へ居り御貴殿のお話を承はる事に仕る、

早く伊織殿に從つて参られる様に……」と安兵衛は源五右衛門を顧みて云つた。

「イヤ思ひは同じ御貴殿も拙者も今生のお名残、一度お面を拜したくは思へども、拙者一人お面を拜し、御貴殿お面を拜されざるは何とも以て如何……」

「片岡氏、女々しき事を仰せられず、拙者も武士でござる、斯る場合に臨んで一人なりとも御主君に拜謁するを得れば、其れにて足れりと致すべし、疾々お出でこそ然るべし」

「イヤ堀部氏、御貴殿こそ君公の御寵愛深く、御父彌兵衛殿御先代より深く愛されし御身、堀部氏、其許御對顔あつて宜しからう」

「イヤ、片岡殿こそ参らるべし」と、兩人は押問答をして居て果しが無い。「ハヤ時刻移れり、何れとも決せられよ」

伊織の一言に、源五右衛門屹となり「御當家様のお情け、水泡に歸するも如何、

堀部氏、早く参られよ」と、此言葉に安兵衛ハツとして、

「片岡殿、御貴殿を擱いて拙者が立つは甚だ不條理なれど、先頃より風邪の氣味にて出仕致し兼ねたる武庸、切ても御名残、不作法ながら御免を蒙る」とツと立つた。伊織は安兵衛武庸の手を取つて、御書院の庭へ連れて行く。

時は彌生中旬で御書院の庭前は、一重は散れど八重櫻が今を盛りと咲き亂れて居る。ソヨ吹く春風は無情にも其花瓣をサツと散らす。安兵衛は悄悄と案内されて其櫻の下に蹲まつた。

此時玄關には御上使との觸込み、田村右京大夫は玄關まで出迎へ、案内につれて

検視の役人は奥へ通つた。右京大夫は淺野内匠頭へ上使入來の趣を申聞けた。長矩は衣服を改めて右京大夫に連れられ、上使受けとして書院の廊下を徐々と歩んで行く。

と、此時堀部安兵衛は、今ぞ主君の御顔の見納めと、櫻の下から進まうとした。
右京大夫はチラリと見て、

「如何に内匠殿、あの櫻の下で御家來堀部某とか云へる者、御貴殿へ今生の暇乞ひ
目通り致したきとの願ひ、叶はざる事なれども、某彼れが赤心に愛で彼處に控へさ
せ置きたれば、御聲掛けさせられ彼れが望みを晴らして遣はされよ」

「ナニ拙者家來罷在りしと……」と、内匠頭は思はず縁より見下ろして「オウ……」
と云つたが頼には言葉が出ない。

「……」安兵衛は無言に内匠頭を見上げて、ハラ／＼と涙を零した。

「オウ武庸か、過分なるぞよ」内匠頭もハラ／＼と落涙するを袖に押へて「今日右
京殿の心入れにて、其方に今生の名残が出来来る、只吉良殿を討ち漏らしたは推量い
たせ、其方一人是に出づれば、家中の者一同に逢うたも同様、只内藏之助へ今日の

事物語れ、百年の後安兵衛冥府にて待つぞよ」と云ふ聲さへも濕り勝。
安兵衛は只涙に暮れて内匠頭の顔を見上げたが、眼も眩みて心も消えるばかり「ハ
ハツ……」と言葉もなく其れへ打伏した。

非情の櫻も哀れと思ふか、葩一片二片ひらくと散つた。

「安兵衛ハヤ參れ、吳々も内藏之助に今日の事物語れよ」

内匠頭は恚う云ひ放つて、意を決して右京大夫に導かれ此場を立去つた。

安兵衛は延び上つて後姿を見送つたが、其儘伊織に伴はれて元の席に歸つた。

「君公にお目通り致されたか」源五右衛門は膝を進ませて安兵衛に訊ねる。

「伊織殿のお情にてお目通り致してござる」

「シテ君公の御様子は……」

「常と變りて哀れなる御姿にて、上野殿を討漏らせしを頼りに御無念の様子、只國

許の内蔵之助に物語れよとの御言葉、其れに尙果敢なきは、百年の後冥府に待つぞよと斯く仰せられた。片岡氏御身の事も申上けんとする内に、時刻移りて君公は廊下を過ぎたまふ、此武庸も涙にくれ、其場に圖らず泣き伏したり、其間に君公の影は見えず相成つてござる」と安兵衛は新たに涌き来る涙を拂つて云ふ。

源五右衛門も共に涙に呉れ、

「御身は君公の御顔を見奉りしことなれば、其れにても未だしも、承はる源五右衛門、御身が言葉の端々を聞くにつけても断腸いたす、さぞや上野殿を討漏らせしを御無念に思すならん……」と、勇士も暫時は言葉なく、濕り勝ちに控へて居る。

内匠頭は安兵衛に別れて検視の前へ出た。

「御上使の御役御苦勞千萬にござる」と挨拶する。庄田下總守威儀を正し、

「上意、」

「ハッ」と内匠頭頭を垂れる。

「申し渡す。浅野内匠頭儀吉良上野介に當座忍び難き意恨有之殿中を憚からず時節をも辨へず刃傷に及び候。段不届至極に就き切腹仰せ附けられるものなり」と讀み上げて、下總守は書付を内匠頭に下し置かれた。

内匠頭は一渡り眼を通して「上意の趣畏まり候」とお請けして「御検視御大儀に存する」と會釋した。

内匠頭は生害の場所は何處であらうと見渡すと、書院の庭上へ白布の幕を張り、半紙貼りの障子屏風一枚を立て、疊三疊を床として其上に荒菰を敷き、淺黄木綿の布團が敷いてある。

「右京殿、長矩殿の生害の場所は彼處にてござるか」と、多門傳八郎が訊いた。「如何にも左様でございます」

「これは其許が取計ひなるか」

「イヤ左様にはござらず、御檢視庄田下總守殿の仰せ附けてござる」

多門傳八郎キツと色を變へた「これは庄田氏、苟くも朝散大夫たる播州赤穂の城主、淺野内匠頭切腹の場所を庭上に設けらるゝとは如何なる御存慮あつての事か、多門傳八郎に一應の御相談なきは甚だ以て合點ゆかず、一應お伺ひ申す」と詰め寄つた。下總守ニツと笑つて、

「多門氏、何をか仰せられる。此度内匠頭は將軍家大切の御勅答の日をも辨へず、松の御廊下を血に塗らしたる大罪人、縛首をも仰せ附けられるべきを、有難くも切腹、拙者公儀を憚り田村家へ命じて庭上に床を設けさせ、其上にて切腹させるのはこれ公儀の御慈悲でござる。譬へ五萬三千石の主人たりとも、其罪重ければ庭上の切腹何の仔細ぞあらん、殊に我等は正使にして其許は副使なれば、別に相談に及ぶ

べきもでもござるまい」と冷笑の氣味で云ひ除ける。

「異な事を仰せらるゝものかな」と傳八郎は膝を進めた「譬へ大目附の言葉たりとも道に違ひし事は申さねば成らぬ。將軍家の御存慮、五萬三千石の主人を即日切腹仰せ附けらるゝは互ひの怨みを残さぬ爲、通常の罪人すら、其罪を憎んで其人を憎まず、況んや一國一城の主、庭上の切腹などは前代未聞の事でござる。傳八郎屹度此事老中方まで進達いたし、何とか御處置を蒙らねば相成らぬ。それとも速かに御場所を改められるや」

「黙れ多門傳八郎、斯様な事は其許の關與ところにあらず」と云つて下總守は内匠頭に向ひ、疾々内匠頭には庭上に出て切腹致して宜からう」と横目で傳八郎をチロリと睨むだ。荒木重左衛門口を入れて、

「先々多門氏、左様御目附と御口論致されては、御場所柄として宜しくござるまい」

田村邸の切腹

と兩人を押へて『田村氏、時刻が移りますます』と注意した。

『ハ、ッ』右京大夫は内匠頭を促して庭上に降ろした。内匠頭は荒庭の上の布團に坐つたが、無念の涙を流して屹と下總守を見詰めた。

『嗚呼斯く相成つて兎や角申すは、我れ臆れたるに似たり、長矩苟くも清和の末葉一城の主を庭上に生害さすとは何事ならん。さりながら今更ら云ふも愚痴なり』と思ひ諦め、料紙硯を求めて辭世を残した。

風さそふ花よりも亦我れは尙ほ

春の名残を如何にとやせん

萬斛の怨みを呑んで遂に内匠頭は切腹をした。行年三十七歳。徒目附磯田武太夫が介錯をして首級を擧げた。

庄田下總守始め一統は、檢視を濟ませて田村邸を引拂つた。片岡源五右衛門、堀

部安兵衛は内匠頭の遺骸を受取り、辭世並びに短刀をも乞ひ受けて鐵砲洲へ立歸つたが、表立つて葬式致す譯にもならず、早速高輪萬松山泉岳寺へ家中の者共が埋葬し『冷光院殿前少府朝散大夫吹毛玄利大居士』と謚した。

斯る順序に事を處して行く中にも、一方公儀よりは戸田采女正に仰せ附けて、淺野内匠頭の屋敷廻りの辻固めをさせた。これは吉良上野介存命ゆゑ、萬一淺野の家來共狼藉致すやも計られずとの遠慮からである。又同日奉書を以て本家松平安藝守へ對して、内匠頭家來早々退散仕るべき旨申渡せ、といふ下知を傳へた。

淺野家の混雜は一方でない。そこで泉岳寺から夜の九ツ時に歸つた堀部安兵衛、片岡源五右衛門、大高源吾、竹林唯七、奥田孫太夫など額を鳩めて相談に時を移したが、さて何日まで秘して置く事も出来ないから、奥方に委細をお物語いたさうと夜中御前に伺候すると、

田村邸の切腹

「皆の者何の用でありまするか、定めし我夫さまの事でありませう、殿様は如何遊ばされたか、松の御廊下で御刃傷あそばしたと云ふ事であるが、其後は如何なされたか」と奥方の一言。先を越されて一同は、

「ハ、ツ其後は……」と云つたが言葉が出ない。奥方は膝を進められて、

「源五右衛門始め皆の者、殿の御身の上を話すこと叶はざるか、足らはぬなれども内匠頭が妻、淺野式部少輔が娘如何なる事たりとも取亂すやうな事は致しませぬ、サア有體に申聞けよ」と立派に云つたが、それでも聲は顫へて居る。片岡源五右衛門今は證方なく、懐中より紫の帛紗に包みし白木の位牌を取出だし、

「……殿様には、斯様な御姿にならせられまして御座る」

「さては我夫様には、御位牌にて……」と手に取上げて、暫時は涙と見詰めて在られたが、我れを忘れて忽ち帯の間の短刀抜き放ち既に自害をしようとした。

「先づ暫らく、何故あつての御生害……」と源五右衛門は驚いて止めた。此時御傍に居た戸田の局が、

「御免……」と云つて短刀を抜き取つた。

「内匠頭様御菩提は、誰れが弔ひ申されますぞ、御短慮は御無用で御座る」と源五右衛門は叱るやうに云ふ。

「ワツ」と聲立て、泣き伏した奥方は、旋て屹と顔を上げて「成程皆の者の申する如く、男子の一人もあるなれば、此屋敷を引渡さず相果てべきものなれど、子供とて無き此身、是から先は是非に及ばず、南部坂の式部少輔が屋敷へ参るべし、跡は宜しう皆の者に頼むぞや」と云つて決心の色を面に浮べた。源五右衛門以下は戸田の局に吳々と御身の上を頼んで退ぞいた。翌日奥方は南部坂の御實家へ歸られ、黒髪を切つて諸泉院と唱へられた。

無情の風は何處まで吹き捲るやら、雲間を漏れて出る月を掠めて、杜鵑の鳴音が一聲二聲聞えた。

三番早打

淺野家一家中の者非常に狼狽をして居る中にも、至急國表の城代家老へ注進せねばならぬと云ふ、此人選に預かつたのが茅野三平である。

「併し一人にても心許なし、副者を遣はしたいものであるが……」と云ひ出したのは堀部彌兵衛、座中を見渡すと江戸屋敷に居る淺野の家來は皆、主人の刃傷に氣が顛倒して居るから、顔色まで變つて魂も身に添はざる有様、そんな浮々して居る者を赤穂まで赴かせる事は出来ない、誰が可からうと評議の處へ後の襖をサラリと開けて入つて來たのは速水藤左衛門である。

「イヤ茅野氏、お若いがお見上げ申したもので御座る、願はくば此藤左衛門副使と相成り、國表へ罷越し御城代へ委細申上げるでござらう」

「イヤ御身ならば願ふ所でござるが、併し其許は長の病氣であつた故に、俄かに馬なり駕籠なりに揺られたなら、嘸かし御困難とお察し申す」

彌兵衛が口を入れると、藤左衛門首を振つて、

「堀部氏に似合はしからんお言葉、主君の爲に今日命を棄つるは臣の願ふ處、速水が命は何のものかは決して苦しうござらん、茅野氏御役目御苦勞千萬、藤左衛門御同道致すでござらう」

「速水氏、御病中御役目御苦勞千萬、イザ三平お供致すでござらう」と急いで準備に取掛り、八人とんほの早駕籠を命じて三平、藤左衛門は布を以て腹を巻き、鉢巻をし、駕籠の棒から屋根を通して布を下けて是に縋るやうにし、若干の金子を用意

して、

「さらば各々方、御機嫌克う、何れお目に掛る時節もござらう」と云つて玄關式臺へ立出でた。

「然らば御兩人何分御城代へ宜しく……」と、送り出した一同が云ふ。

「心得ましてござる」と駕籠に打乗り、吊してある布に攔ると、駕屋は威勢よく擔

ぎ上げ、御門を出ると鐵砲洲を後に宙を飛んで、目指す先は播州赤穂の刈屋城。

國元には城代家老の大石内藏之助が居る。この内藏之助は江戸の騒動を二日後に

知つたと云ふ器量人である。一説には赤穂城中に蜂合戦が三日も續いてあつたと云

ふ。總て螢合戦——蛙合戦——雀合戦などは空氣中に殺氣を現はし、鳥獸へ自然其

氣を移すものと見え、斯様なことのあるは不吉の報せと云ひ傳へてある。是等の事

から内藏之助は、江戸表にて主君が響應使御大役中何か役向きに落度があつた譯で

はあるまいか、蟲が知らずとでも云ふのであらう、他人にも語らず獨胸を痛めて居ると、三月十八日に江戸表から早駕籠の使ひが乗込んだ。これを聞いた内藏之助は「スハこそ何か變事があつたのであらう……非常の事なれば苦しからぬ、玄關先まで乗打を致させよ」と吩咐けて置いて、近藤源四郎に氣付の藥を手當として用意させ、自身玄關先へ立出でた。

「ソレ手當を致して遣はせ」

畏まつて若侍が駕籠の戸を引開けると茅野三平、速水藤左衛門は力綱に取絶つて前後不覺に氣を失つて居る。

近藤源四郎が駕籠より兩人を出して活を入れ、藥湯の手當をして「城中でござる

お氣を確かに持たれい」と呼び活けた。

茅野三平と速水藤左衛門は眼をバツチリ開いて見ると、一同が居並んで居るから

「ハッ」と禮をしたが、未だ氣が治まらんと見えて誰も居ない方へ辭儀をした。
「三平、藤左衛門、速しき早打の次第、仔細は如何に」と内藏之助の一言。ハッと胸に應へたか、

「一大事出来致してござる、豫て我が君勅使饗應役御勤役中、如何なるお心得違ひにや、御師匠番吉良上野介殿へ殿中にて、去る十四日四ツ半時殿様御刃傷に及ばれまして御座る。尤も妨げたる者あつて上野介殿は僅かの擦傷を負うたのみ……」と云つて三平はホッと一息吐いた。藤左衛門引取つて、

「私共兩人第一の早打とし罷越しました、追々跡より仔細の急報も参るでござらうが、先づ取敢ず此段御注進申上げまする」

此椿事を聞くや一同の者は「アッ」と顔の色を變へた。と云ふは多分御家斷絶吾は縁離れに成らうと云ふ推察から、云はず語らず一同顔見合せたのであらう。

内藏之助は動する氣色もなく、ツと席を進めて「藤左衛門、三平の兩人十四日四ツ半時の椿事とあれば……」と指折り數へて「フム四日半日に相成る、さてく遅い早打よ、御身如き柔弱武士が江戸表に居ればこそ斯る椿事も出来るなれ、も少し速かな急報を勤める者がありさうなもの……誰かある狼狽武士の大小もぎ取り、徒士目附當番所へ打込め」と一喝した。

「ハッ」と云つてバラ／＼と立掛つた若侍、藤左衛門三平の大小を取上げ、キヨロキヨロして居るのを引立つて當番所へ打込んで了つた。

跡に内藏之助は近藤源四郎を側近く呼んで「さて近藤、藤左衛門三平は只だ氣を疲らして居らる、今一時に安心を與へては心氣の釣糸断れて死するは必定、殺すは惜しき武士である、依つて勇氣の恢復を圖つてやりたさ、差當つて施す術も無いに依り、怒りの氣を鋭く持たして置くの外はないと考へて當番所に打込んだ、其許

大儀ながら兩人に手當を致して呉れます様」と吩咐けて奥へ去つた。源四郎は其れから喇など侷めて二人が身體の恢復を計つた。

「さて御兩所、唯今より御城代が御面會致されますとの事ゆゑ、何卒此方へお出で下されい」

一時静養させて源四郎は、兩人を内藏之助の前へ誘つた。

「これはく御兩所、さあ何うぞ此方へズツとお通り下さい」氣輕に内藏之助は云つて二人に席を與へた。「今般は遠路の處御役目とは云ひながら、如何にも御苦勞千萬に存する、又先刻は段々と失禮の舉動をいたせしが、是は拙者心あつて致せし事全く拙者の計略でござる、それと申すも遠路の早打、御家の大事に心を奪はれ、早く國表へ知らせたいと逸り居れば途中は勇氣も満ち、精神も確かなれど、早や當城へ着し最う安心と思ふと俄かに心緩み、身體疲勞し、殊に依ると生命の綱も切れ果

てる事もござる、それ故に御兩所の勇氣の失せぬやう故と無禮の舉動を致したのでござるから、何卒惡しからず御容赦を願ひたい。最早や御兩所も大分精神も落付かれたであらうから、内藏之助お詫び致した上改めて江戸表の様子拜聴いたすでござらう」と、云はれて茅野、速水の二人は顔見合せて、さてく大石と云ふ人は噂に違はず大器量人であると思つた。

「これは恐れ入りましたお心着け……さて大夫、江戸表に於て一大事出来致したのは、今度殿様勅使饗應の御役目に就き、御師匠番吉良上野介殿の爲めに散々の目に遣はされ、本月十一日勅使到着の當日は一たび品川に於てお手違ひ、翌十二日は二たび芝増上寺に於て御料理獻立のお手違ひ、十三日御能拜見の當日には三たび御服装のお手違ひ、重ねく吉良殿の爲めに耻辱を蒙り、幾度か面目を失ひ給ひ、遂に十四日勅使饗應の當日、殿中松の間の御廊下に於て御刃傷、梶川與三兵衛に抱き止

められ御無念を晴らしたまはず、吉良殿はホンの擦傷を負うたま、逃げ去り、殿様は大勢の爲め取押へられ、時を移さず芝愛宕下田村右京大夫殿へお預けの身となられ、一同の驚愕一方ならず、萬事は評議の上我々兩名第一番の早打として乗付け参つてござる」と二人が交るぐに内蔵之助に物語つた。内蔵之助は驚くかと思ひの外、靜かに俯向いて涙をホロリ零した。

「イヤ御兩所とも遠路の處太儀でござつた。今はこれ迄でござれば及ぶだけ御家の爲に盡すより外ござらん」慙う云つて内蔵之助は兩眼を閉ぢて深く考へに沈んだ。

中二日置いて第二番の早打として、片岡源五右衛門が赤穂へ乗込んで来た。内蔵之助は、早速手當をさせて一室へ請じた。

「片岡氏、江戸表の凶變は一番の早打に依つて承知致した。其後の成行きは如何でござる」

内蔵之助に問ひかけられて源五右衛門は、零る、涙を拭ひもやらず「さて申上ぐるも先立つは涙……とは云へ云はで叶はぬ注進の役、我が君九ツ半時に白河口より芝愛宕下田村右京大夫殿の御屋敷へ御預けと成り、其日夕七ツ時上使として庄田下總守、多門傳八郎、荒木重左衛門御渡りに相成り、宿意を以て場所柄を顧みず大役を忘れ上野介へ刃傷致したる段不届に就き家名断絶切腹申付くるとの上意、折能く拙者堀部安兵衛と田村邸に御遺骸受取りとして罷越しあり、其節安兵衛御臨終の御目見得許されましてござる。是なる御短冊は御自筆の御辭世、此帛は御生害にお用る遊ばされたる來國俊の御肉通しの短刀、此二品は大石に渡せ……予は無念であつたと内蔵之助に告げよとの言葉でございました。されば此品々謹んで持参致しましてござる。又御尊骸の儀は家中一同にて高輪泉岳寺に葬り奉り、御法號も拙者頂戴いたし参つてござる」と御遺物並びに御法號の書附を取出して大石に渡した。

内蔵之助は其三品を拜見して、

「イヤ片岡氏、今度は御役目如何にも御太儀千萬、御遺物の品々並びに御法號、確かに受取りましてござる。種々と急場の働き大石如何にも感服いたしてござる、貴所は退つて休息召され」と源五右衛門に休息を與へた。

第三番目に早打の役を勤めたのは原惣右衛門元辰である。内蔵之助に對面をして江戸屋敷は三日間に引拂ふ事から奥方様を南部坂の淺野家へお預けして、家中一同の者は一先づ赤穂へ集まる様、御城代の指圖を仰ぐべき旨申渡した事まで落もなく物語つた。

聞いた内蔵之助は、もう歎くどころの汰沙でない、集まる淺野の遺臣を赤穂城中表御廣書院へ引いて一大評議をしようと思つた。

此間に江戸屋敷に於ては江戸家老安井彦右衛門、藤井又右衛門の兩人は身分を顧

みず御用金を掠めて行方知れずになつて了つた。

赤穂城中大評定

一番二番三番と江戸屋敷から早打が来たから、一家中の騒ぎは一方でない、忠義の者は己の身を忘れて東西に奔走する。不忠の者は我が一身をのみ思ふ故、そろく家財を取片附けて退散の準備をするなど、其混雜は到底筆舌に盡し難い程である。

この有様を見極めた内蔵之助は、家中一同の者の剛臆を試すには金錢に越したことはないに依つて、御蓄への金子十三萬兩を御遺物として分配し、金錢を握らして見れば忠不忠が分る。死を惜まぬ者は金錢には眼を呉れまじく、又死を惜み一身一家の事のみ思つて、念頭に忠義の二字を抱かぬ者は、金錢を握れば直様何れへか退散するであらうから、正邪を見抜くには金錢を握らせるが上策と考へ、元祿十四年

四月十七日に城中の大廣間で會議を開くことにした。

此時には江戸詰めの中一一般はもう大抵國表へ立歸つて居た。觸れを聞いて集まつた者は皆大廣間へ通す。内藏之助は岡島八十右衛門、芽野三平、原惣右衛門、貝賀彌左衛門に命じて十三萬兩の金子を山と積ました。

「さて大野氏、今般御家の大變、今更數言を費すとも返ら事ぬ、就ては先般も一寸御協議申した通り、常州笠間より此播州赤穂へ御國替へに相成つた節、先君采女正長友様の厚き思召に依り、拙者の養父大石主殿が繩張いたせし城なれば、切て御舎弟大學様へ半地なりとも下し置かるゝものか、又は御本家藝州様より御下知是るか。此二つの内なれば我々も快よく此城を公儀へ明渡さん、なれど内藏之助が察する所にては、目下の形勢では到底此兩様とも協ひ難かるべく、唯速かに城渡しを仰せ附けらるゝに相違ない、されば我々の向背如何にと云ふに、無論城を枕として戦死

いたすの外はない、就ては今日お蓄への金子を一同の者に配附し、妻子を立退かしむる費用、雇人等に遣はすべき費用、其他萬事の雜用に支拂ひたる殘金を肌付金とし、充分準備いたしたる上籠城いたす覺悟でござるが、大野氏には如何思召さるゝや」斯う云つて内藏之助は大野九郎兵衛の顔を窺つた。

「イヤ御城代の云はつしやる處は、最も拙者同感でござる、萬一城受取りの同勢來たらば、此白髪頭に兜を頂き、腕に覺えの一槍提けて、譬へ二萬三萬の大敵たりとも大野一人にて引受けて御覽に入れるが」と腕を叩いた九郎兵衛、ニヤリ笑つて一同を見廻しながら「併し其れは然うと、早く肝腎の金子を配當して貰ひたい」と云つて膝を進めた。

「就ては其お金配當も高割ではござらぬ、無論頭割に致すであらうな」と内藏之助は遮つて云ふ。

「ナニ頭割とは何事ぢや、千石は千石、百石は百石と高下のあるものだから、是は無論高割にせんければ可かん」と九郎兵衛は顔の色を變へる。

「イヤ御尤もの仰せなれど、餘の儀なら格別斯様な節に高割に致しては、小身者が誠に行立たん。御同様に大祿を頂戴いたして居る者は、平素覺悟もあること故、多少の蓄へも致して居るから……」斯う云つて内藏之助は九郎兵衛のムキになる顔を見て笑つて居る。

「イヤ大石氏、それは可かんと申すに、九郎兵衛頭割は大不承知、拙者は高頭二千石であるから、二千石の割で配當して貰ひたい、貴公は千五百石であるから、其れに應じてお取りなされ」

「それでは小身者が困るから……」

「イヤ困らうが困るまいが、拙者と關係した事ではござらん、小身者は平生から其

れだけ祿が少ないのだから據ござらん。拙者は飽迄頭割は大不承知だ」
強慾な九郎兵衛の言葉に先づ武林唯七がクワツと怒つて、突如席を立つてツカくと大野の前へ来て腕を扼した。

「元老、最前より承はれば、御城代は頭割にせんければ小身者は行立たぬと、格別の思召を以て下々を御憐憫なさるに、尊公一人高割でなければ不承知だとは何だ。最前は何と仰せられた、二萬三萬の同勢を引受け、城を枕に快よく戦死いたすと云はれたではないか、討死するのに其んなに金が要るか、口先ばかり大言を吐き居つて、其實配當の金子を擱んで逃ける了簡だらう、此狸親爺奴、左程金子が欲しければ、此十三萬兩悉かり背負つて行け、汝今一言高割なぞと云つて見る、此拳固が頭上に飛ぶぞ」と勢ひに任して打たうとした。内藏之助は大聲に制して、
「コレ、武林、何と云ふ無禮をする、内匠頭家來は大變に望んで度を失ひ、重役

に對して無禮を働いたと云はれては、冷光院様のお名前が出るぞ、控へて居れ」

内藏之助に怒う云はれては仕方がない、唯七はスゴくと元の座に戻つた。

大野九郎兵衛は蒼白になつて顛へて居たが、ホット息を吐いて猶も懲すまに「イヤ何うも武林と云ふ奴は亂暴な奴だ、斯様な席で腕力を弄するなぞと飛んでもない事だ。時に大石氏、拙者は何うあつても高割と申したが、拙者一人高割と申した處が御承知はござるまい、宜しい何うともなさい」と一同の氣色を窺つて云ふ。

内藏之助は四人の金奉行に命じて帳面へ人數を記させた。

「コレ、岡島、割當てべき人數も大抵相分つた以上は、是より十三萬兩の金子それぐ計算の上、分配に取掛らねばならぬが、其十三萬兩の内より五萬兩を差引いて貰ひたい」と内藏之助は八十右衛門に命じた。九郎兵衛は吃驚した顔色で、

「一寸お待ちなされ、何う云ふ譯で五萬兩引かるゝか、其譯を承はりたい」と踊り

出る。

「これは前々よりお約束申せし通り、城受取として公儀より多くの人數來たる時、是を引受けて一戦なし、譬へ一日でも籠城叶ひなば泉下に在する君公も定めしお悦びに相成るでござらう。左すれば其れに充つる費用、即ち軍用金として五萬兩差引く、無論御不同意はござるまいな」

理の當然に九郎兵衛は不承知を唱へる事は出来ない「成程軍用金相分つた」

「残り八萬兩の内より一萬兩差引く、これは御舍弟犬學様お手元御入用として差引かねば相成らん」

「仕方がない相分つた」九郎兵衛は面膨らして居る。

「残り七萬兩の内より一萬兩引く、これは御臺様御手元御入用として差引きます」

「成程尤も千萬……」

「残り六萬兩の内三萬兩引く」

「エ、能く引くな、今度は三萬兩とは大きい、それは全體何でござる」

「これは御領分に通用する金札錢札引換へに差向けるのでござる」

九郎兵衛は眞顔になつて「イヤ城代それは餘計なお世話だ、五萬三千石の家が改易となり、當赤穂城も場合に依つては明渡さんければならんと云ふ大騒動であるから、百姓町人ぐらゐの損耗は顧みては居られないではござらんか」

内藏之助はデロリ睨んで「これは大野氏怪しからん事を仰せられます、町人百姓等が何れも後世まで反古同様の金札錢札を握つて居つたなら、ア、是は淺野様御繁昌の時分通用したものであるが、御家改易の時反古同様となり、親父の代に幾ら損をしたと其度に冷光院様の御名が出る譯でござれば、是はどうしても差引かねば相成りますまい」と屹と云つた。

「仕方がない、何うとも勝手になされ」と、九郎兵衛は呟いて居る。これから内藏之助は芝愛宕下青松寺、高輪泉岳寺、國元菩提所華岳寺へ千兩宛の修堂金として差引き、尙ほ三千兩を出入町人共へお遺物として遣はした。残り二萬四千兩を割附するのだが、其翌日一日掛りで漸く割附し終つた。

さて盡く金子を割附して見ると人心と云ふものは能く分るものである。生命を惜む大武士は君恩も何も云つたものでない、我が身さへ安全なれば宜いと家財を取片附け、妻子の手を引いてゾロ／＼赤穂を退散し始めた。就中最も慨嘆に堪へないのは家老高頭たる大野九郎兵衛、玉蟲七郎右衛門の兩人が姿を隠した事である。内藏之助は此事を聞いて長大息をして、さて／＼人は見掛けに依らぬものである、過日評定の席ではヤレ二萬三萬の敵を引受けるの、ヤレ白髪頭に兜を戴き壯者の眼を驚かして呉れるのと敢圍いて置きながら、人先きに退散するとは犬にも劣る腰拔武

土と切齒をした。

大石は江戸表より早打の來た其日から、我が屋敷へは歸らずして城内へ詰切りである。で種々と善後策に心を碎いて居るが、續々と逃亡する者の相踵ぐを見て、實に頼むまじきは人心、如何に澆季の世とは云ひながら手を翻せば雲となり、手を覆せば雨となる、紛々たる輕薄反覆なきには今更ながら呆れた。併し残つた者が五十名ある、是は死を共にしようと思ふ者ばかりである。

内藏之助は此五十二名の者へ廻狀を發した。其主意は、去る十七日御一同を會して御相談致したのは、詰り當城を枕として戦死をする覺悟、それに就ては妻子眷族を他へ立退かしむる費用、或は肌付金等の爲に金子を配當したが、扱金子を握つて見れば續々赤穂を退散すると云ふ有様、残る五十二名位にては到底籠城覺束なければ、其れよりは一層のこと一同切腹して、泉下で殿に御奉公するより外なければ、

殉死をしてなりと義を買かうと思ふ士は、明後二十三日午の刻までに一同死装束で城中表廣書院へ出頭すべしと云ふのである。

五十二名の者は無論死を惜まざるの大丈夫ゆゑ、當日には一同死装束で我れ遅れじと登城した。内藏之助は大きに喜んで、先づ表面には冷光院殿先朝散大夫吹毛玄利大居士の位牌を飾り、供物を備へ、其前に大石内藏之助は水色無地の死装束で座つて居る。

「さて御一同、當家の不幸は我々の不幸と相成り、今は云うても詮なき事、君辱しめらるれば臣死すとかや、況して我君は空しく恨を飲んで地下の鬼となりたまひたれば、我等は一日たりとも籠城なし、城を枕に戦死なさんとせしも水の泡、頼むまじきは人心、お金配當の當日より逃亡する者踵を接し、残るは僅かに五十二名、到底此少人數にては籠城覺束なければ、此上は潔よく切腹して君の御後を慕ひ參らせ

んの覺悟、各々方も御異存あるまいな」と、内藏之助は一同を見渡しながら憊う云つた。原惣右衛門元辰進み出て、

「是は御城代の仰せ如何にも御尤も千萬、今小勢を以て籠城なせば却つて諸家の嘯ひを受くるは必定、寧ろ殿様の御供をして冥途へ参るが何よりの策、一同も覺悟致して居れば、イザ大石殿から御切腹召されよ」

「委細承知仕る。併し其前に一應各々方に御覽に入れる品々あり、謹んで拜見致されよ」内藏之助は傍の帛紗から恭々しく取出した品を、左右の手に持ち高く差上げ「御一同御覽あれ、此品々は殿様の御遺物、御生害の節お用る遊ばされしお肉通しの短刀、お肌付のお襦袢、又是は御辭世の短冊でござる。御墨色も生々しく「風誘ふ花よりも又我れは猶春の名残を如何にとやせん」とお認め遊ばされたり、此品は堀部安兵衛殿々様御生害の折、田村邸に於て拜謁仰せ付けられ、國表なる内藏

之助に渡して呉れよと賜はつたる物でござる。其れを片岡氏が第二番の早打の節持参して、拙者お受敢申せしもの、實は早くより御一同に御披露いたすべきなれど、忠義の二字を心得ぬ大武士等に見するは御遺物の汚れとなる道理、されば今まで秘藏なし、忠義金鐵の如き御身等にのみ拜見いたさるのでござるから、此お遺物に對しても、見苦しき死様は致されなよ」と聲頭はして云ふ。聞いて一同感に打たれ鬼をも挫ぐ荒武者も、堰き来る涙止め敢ず、誰あつて頭を上ぐる者とてない。内藏之助は起つて御遺物の品々を位牌の前に飾り、再び座に着き左右をズツと見渡したが、

「オウ其れなるは矢頭長助の悴衛門七であつたるよな」と、右側の末座に控へたる十五六の少年に眼をつけて云つた。

「の、ッ……」と衛門七は頭を下けた。

「衛門七是へ進め、其方は何歳であつたな」

「十六歳に相成りまする」

「左様か、其方は殉死の儀は相成らんぞ、内匠頭家來は二十歳未滿の者まで、無理に死に到らしめたとおつては、亡君へ對して恐れ入る。其方は只今より家に歸り母親に孝行を盡せよ、確か其方は老母があつた筈ぢや、又後々へ生残り殿様始め我々共の回向供養を致し呉れなば、死に勝る忠義と申すものである。サア早く此場を立去れ」と、凝と其顔を見詰めて云つた。

若年ながら行儀正しく手を仕へた衛門七は、内藏之助を怨めしさうに見上げて、「御城代へ伺ひまするが、私は十六歳の若年ゆゑ、殉死の儀は相叶ひませんか」如何にも、若年にして殉死いたすと云ふ事は、他家への聞え、第一御本家へ聞えても穩かならぬ事、依つて切腹の儀は相成らん」

「然らば伺ひまするが、御城代のお側には御子息主税殿御着座でありまするが、主税殿は當年十五歳、拙者よりは一つ年下、然るに御城代の御子息は若年でも殉死が出来、身分輕き者は若年では殉死相叶はんと云ふ道理はござりますまい。主税殿お羨ましくござる、貴殿は城代内藏之助様の御子息なるに依つて、拙者から見れば年下でも殉死の儀お許しに相成り、殿様のお側にて御奉公も叶へど、某は殉死の儀お許しに相成りません、何卒其許様よりお父上様へ宜しくお願ひ下されたく、此衛門七も冥途の殿へ御奉公出来まするやうお取做し下され度、偏に願ひ上げ奉りまする」と、兩眼に涙を浮べ眞心籠めたる一言に、主税も氣の毒に思ひ、

「これは、お察し申す、然らば拙者より父上へ申入れませう、お父上、お聞きの通り衛門七儀は、覺悟致して居ります故何卒殉死の儀お許し置かれたく……」とひたすらに願つた。内藏之助も頷いて、

「これは内蔵之助近頃誤りを致したり、城代家老の俸だからとて、十五歳の其方に殉死を許し、年増れる衛門七を遠ざけしは少しく依估に流れたり、造次頼浦の間といへど心亂さず、いまだ公正の處置を取らねばならぬこと、少しにても偏頗があつては宜しくない、然らば衛門七ばかりでない、主税、其方も殉死は相叶はん、只今より宅に歸り吉千代、大三郎と共に何れへなりと退散いたせ」

聞いて主税は大きに驚き、いとも當惑の有様。此時衛門七は起つて主税の前に来て「主税様、私ゆゑにお父上様の今の御一言、誠にお氣の毒に存じます、併し若年は若年同士とやら、此上は拙者の申す事をお聞濟みに預りたい」と屹と云ふ。

「如何なる儀にてござるか」
「若年者は殉死相叶はんとならば、據ござらん、尊公と拙者と兩人耦刺へて相果て冥途の魁をいたさうではござらんか、泉下へ参り殿様へお目通りいたし、御城代の

お許しなき故兩人共耦刺へて黄泉へ参りましてござると申上げたたら、眞逆に歸れといふ御意もござりますまい、如何でござる尊公と兩人魁いたさうでは御座らぬか」
主税は莞爾と笑つて「これは好い處へお心附きに相成つた、譬へ父が宅へ歸れと申しても、何面目あつて我が家へ戻らるべきか、然らば衛門七此場に於て其方と耦刺へて、潔く冥途の魁いたすであらう」

「お聞入れ下し置かれ忝けなうござる、然らば御免」と衛門七は短刀引抜いた、主税もズラリ短刀引抜き、互ひに帶際に手を掛け合ひグツと締め寄せ、兩人は短刀を胸元に押當て只一突きに刺さんとした、此意氣込みを凝と見た内蔵之助は、

「兩人共暫らく待て」と聲掛けた。

「何で御城代お止めなされます」と衛門七。

「父上、何故お止め相成ります」と主税も振返つたが、其れでも短刀は双方の

胸元に擬してある。

「兩人共に蕾の花を散らさずするは不惑と思ひて許さゞりしに、既に覺悟いたして居るからは、殉死の儀は差許すが、併し衛門七、其方は老母に心が残らぬか」と内藏之助が意外の言葉。

「これは又しても御城代は老母々々と仰せらるれど、其れは親子の情なれば心残りぬにはあらねど、昨夜吳々も母より諭され、母に心を残して見苦しき事をして呉れるな、平生高祿を頂戴して御奉公致すのは、我が身體を君に差上げたも同様なれば御家の爲には生命までも御奉公致すのが武士の本分ぞやと、吳々も吩咐けられ、其れに此装束も昨夜母が手づから縫つて呉れましたもの、されば殉死の儀相叶ひませんければ却つて母に叱られます事ゆゑ何卒殉死の列にお加へ下し置かれたく、只誓願ひ上げ奉ります」と衛門七は涙を流して物語つた。内藏之助も殆ど感心して、

「イヤ衛門七、其方の心底は實に見上げたものだ、又母の教訓、聞けば聞くほど感心いたす、實に此親にして此子あり、未だ十六歳の少年にして聊かの間殿の御小姓を勤めしに其御恩を忘れもやらず、殉死いたすの決心は實に内藏之助恐れ入る。是を思へば大野九郎兵衛、玉蟲七郎右衛門など莫大な高祿を頂戴いたし居りながらも跡を隠して行方知れず、獅子身中の蟲とは彼等の事なり、又悴主税を譽むべきにはあらねども、衛門七と同意なし編刺へて相果てんとは能く申した、今改めて切腹を兩人共差許すぞ」と莞爾と笑ひながら申渡した。衛門七は満面に笑を含んで、さも嬉し氣に控へて居る。並居る面々も其忠義の精神に一同譽めない者としてない。

と、此時縁側の障子の外で「お願ひ申上げます、お願ひの者でございませう」と呼ぶ者がある。内藏之助は吉田忠左衛門に、「誰ちや尋ねて見られよ」と吩咐ける。

忠左衛門は障子を開けて見ると、飛石の上に頭を下けて足輕寺坂吉右衛門が控へて居るから「ヤ、其方は吉右衛門ではないか、如何心得て此場へ参つた。お目見得以下の其方は御庭先へ罷出ることばならん、早々に引取れ」と叱つた。

「へエ御道理のお言葉ではござりますが、今日は殿様方御一同殉死をなされますとやら、私も身分卑しい者ではござりますが、冥途のお供がいたしたさに、此場へ出ましてございます。何卒貴方様より御城代様へ宜しくお願ひ下さいまし」と、赤心を面へ現はして忠左衛門に頼んだ。

此吉右衛門とは先年御足輕肝煎を勤め、元は捨子であつたものを吉田忠左衛門が拾ひ上げ、寺へ行く坂路に捨て、あつたところから寺坂吉右衛門と名乗らせた、吉田の家來同様であつたのを、忠左衛門の推舉で先手御足輕肝煎に出世したのである。此時内藏之助は縁側に立出で「其方は何者ぢや」と訊ねた。

「ハイ、私は先手足輕肝煎寺坂吉右衛門と申す者でございます」

「シテ願ひとは何事ぢや」

「外ではございませぬ、今日は皆様方御殉死なさると承はり、私も長らくの間御恩になりました身の上ゆゑ、共に冥途のお供を致したく存じました、それ故憚りもななく御庭先へ出ましてございます、何卒格別の思召を以て切腹仰せ附けられますれば有難く存じます」と恐るゝ願つた。

「コレ、心得違ひを申すな、我々は先祖代々御當家の御厚恩を蒙りし者ゆゑ斯く殉死と決心いたした。其方は些少の扶持を頂戴いたしたる身でありながら、殉死致したいとの願ひは、實に見上げた立派な魂、其志は黄泉へ参り冷光院様へ申上げるであらうが殉死の儀は相叶はん。左様存じませえ」内藏之助は斯う云つて吉右衛門の顔を凝と見た。

「イエ御城代様へ對して誠に恐れ入りますが、大祿を頂戴いたされる皆々様も、御扶持米を聊かでも頂戴いたす私でも、忠義に高下はあるまいかと存じまする、何卒御慈悲に腹を切らして下さいまし、お願いを背いて下されば、何うあつても此處を退散いたしません」と真心籠めて申立てる。

「コレ、重ねて申すと雖も、必ず殉死の儀は相成らん、それよりも立歸つて殿様始め我々の死後の回向を致して呉れよ、必ず心得違ひを致すなよ」と云ひつゝ、内藏之助は障子をビシヤリ閉切つて了つた。

吉右衛門は思はずハツと聲を上げ「左様なら何うあつても殉死は相叶ひますまいか。ア、身分の軽い者は情ないもの、足輕と云ふ處で皆様方と一緒に列んで腹を切る事が出来ないとは残念だ。なアに恚うなりや仕方がない、此お庭先を拜借して皆様より先へ死んで了ひます、三途の川端で待つて居て、さア一緒に連れて行つて

下さいと無理にも其時はお願ひ申します、幾ら足輕でも腹の切りやう位は知つて居ります」と、愚痴を並べながら飛石の上へ風呂敷を擴げ、襟元を掻き擴げて短刀を抜き放ち、二三度腹を撫でてアツヤ腹へ突刺さうとした。

此時障子の蔭に居た内藏之助、

「吉右衛門心底見えた早まるな、殉死の列に加へ遣はす」

「エ、左様なら殉死の列にお加へ下さいますか」吉右衛門は喜びながら衣服の襟を掻き合せた。

「實は汝の命を助けたさに殉死の列に加へ遣はさうし心底なりしが、如何にも汝の志殊勝なれば只今より殉死の列に加へ遣はす、併し足輕寺坂吉右衛門にては列座も如何なれば、改めて冷光院殿へ願ひ上げ、今日より知行百石、役目は馬廻り役仰せ附けられ、侍に取立て遣はすゆる左様心得よ」

斯う云はれて吉右衛門の悦びは譬へん方もない、暫時有難涙に咽んだが、是から座敷へ上りられて席が定まると、内藏之助は冷光院殿の御位牌に向ひ、「恐れながら申上げます、足輕肝煎寺坂吉右衛門と申す者、忠義の志深きに依つて今日より知行百石、御馬廻り役申附けます、此段内藏之助より御披露申上げます」と述べ終つて元の席に返り、左右をスツと眺めて「さて御一同、時刻延びなば悪しからん、各々方もお覺悟あれや、内藏之助第一番に切腹いたす、介錯の儀は中村勘助、奥田定右衛門、間瀬久太夫、倉橋傳助、菅谷半之丞、千葉三郎兵衛、勝田新左衛門、大石瀨左衛門に申附ける。併し各々方も逸まつた事を致されな、失禮ながら殉死切腹には古例のあるものなれば、總て拙者が爲す通りになされい、そして拙者の腹より血の滲み出るを見て後、各々方も腹へ刺されよ、又介錯も狼狽たことをせず、此方より聲を掛けるまで控へて居られよ」と残る方なく指圖して、諸肌

寛ろけ九寸五分を取直し、腹を撫でながらピタリと腹へ當てる。一同も諸肌寛ろけ短刀取直して腹へ當てた。内藏之助は始終の様子を見渡して居たが、短刀を供養の上置き肌を入れて黙然として控へた。これを見ると一同呆氣に取られた中にも武林唯七は、ツと進み出で、「これはしたり御城代、平生のお言葉にも似ず、切腹の間際に至り氣怯れでもなされしか、失禮ながら武林唯七第一番に切腹して手本を御覽に入れませうか」と敦圀荒く云ひ放つた。内藏之助は唯七を顧みて、「アイヤ控へよ武林、内藏之助此場に及んで何條氣怯れのいたすべき、死は一端にして易く生は得難し、今各々方の心底見届けたる上は、某が胸中お明し申す一事あり、必ず心を落着けてお聞きあれや、實は昨夜御本家藝州家御側用人内田孫左衛門殿、町人の姿にてお出でになり、忝けなくも御本家の御内命をば此内藏之助へ仰せ

渡されたり、其儀は御本家より大公儀へ對し、大學殿御相續を再度願ひ出づると雖も御却下に成り、依つて再び御本家より對手方吉良上野介屋敷替へ内願致したる處此儀は御老中月番土屋相模守殿思召を以てお聞濟みに相成り、即ち本所松坂町へ替地いたし、吉良上野介を移したる儀も内々相分りたれば、拙者は各々方と共に、時を待つて復讐を圖らんと存するのでござる。首尾よく本望を遂げ、上野殿の白髪首を申受け亡君の御墓前へ供へなば、さぞやお悦びのことならん、これに就き御本家よりも相當の御助勢下し置かるゝ事も確乎と承知いたしたり、さあらば近日當城引拂ひの儀を大公儀より御沙汰あり、御役人も到着仕るべし其時には速かに當城を公儀へ返上いたし、我々は思ひ／＼に江戸表へ參り、時を待つて吉良殿屋敷へ推參し、亡君の思召を相續いたす心底、これは殿様御最期の際に不肖内藏之助へ賜はりし品々、拜領仰せ附けられしは、志を繼いで呉れいと云はぬ許りの御賜物、内藏之

助素より仇討と覺悟致せども、各々方の心の底も計りかね、今日殉死と稱して各々方の志を試して見たる處、誠に君恩を忘れざる誠忠の士のみでござれば、此五十名が一味同心なすからは、仇討の大事を遂ぐる何の難きことかあらん、無論各々方にも御異存はあるまじく、此上からは充分に身を慎み、小心翼翼一日も早く志を達するよう努められよ」と、初めて明す良雄の心底。一同はアツとばかりに感謝して、色めき渡つて見えた。此時吉田忠左衛門進み出で、「誠に御城代の赤心を承はり、我々共大満足にござる、此上は銘々連判狀へ記名なし、何事も御城代の指圖に従ひたく存する」と云ふ。「能くこそ仰せられた、豫て連判狀も作り置きましたれば、御一覽の上御異議なくば血判に預かりたい」と差出した連判狀、五十二名が順に見てそれ／＼血判した。此連判狀を冷光院御靈前へ供へた内藏之助、

「畏れながら申上げ奉ります、五十二名の者一味同心仕り日ならずして上野介殿を討ち、殿の御心を慰め奉らん心底、何卒泉下より一同の者心願成就仕る様お守り下されたく」と、生ける人に物謂ふ如く謹んで申上げる。是で一同思ひく退散した。

其日城受取の人数は江戸から到着した。御公儀役人の外大手の方は高取峠より脇坂淡路守安輝の同勢取詰め、搦手は猪路越峠より木下肥後守公定の同勢が繰込み赤穂城を遠巻きにして、

- 一、火の元嚴重に可致候事
- 一、喧嘩口論一切不可致事
- 一、武器馬具等一切手を不可付事
- 一、内匠頭所持の雑具賣拂ひ配當可致事

- 一、城内竹木濫りに伐取る不可事
 - 一、貸借の儀は相對に可致事
 - 一、城下引取の儀は御目附方到着より日數三十日を可限事
- 右の條々堅く相守り可申若し違背の者共嚴刑たる可き者也
- 元祿十四年四月

荒木重左衛門
榊原采女

この建札を大手下馬先へ建て、尚ほ城中へは三日間の猶豫を致すから、其間に盡く準備を整へ、潔く城を明渡すべしとの嚴重の沙汰を傳へた。内藏之助は畏まつて御受けをして萬端用意を整へる、夜になると脇坂木下の同勢は各々三段に備を立て、篝火を八方に焚立て、武威を示した。内藏之助は五十二名の者と事々手筈を整へ、火の元を氣を附けさせなどして居る中に廿六日となり、翌日はいよく城明渡しの

當日であるから、城内限なく檢分し、夜に入つては櫓に登つて四方を眺め名残を惜み、其夜は徹夜して曉を待つた。

明れば二十七日、辰の刻頃に大手から入つて来たのは荒木重左衛門、榊原采女、西原新左衛門、岡田十太夫が何れも供方殿重に従へ馳て玄關へ掛つた。大石内藏之助は吉田忠左衛門、岡野金右衛門、富森助右衛門、速水藤左衛門など従へお出迎ひをして、廣書院へ通して挨拶をする。此時荒木重左衛門容を改め、

「其方が内藏之助と申すか、此度内匠頭長矩事殿中御場所柄を忘れ、吉良上野介へ刃傷に及び候段、不届に付き國郡を没收し、當人切腹仰せ附けられたる上は、速かに當城相渡し猶ほ後の御汰沙を相待つやう仕つて宜しからう」と嚴かに申渡した。で懷中から御月番御老中土屋相模守の御書附、猶ほ藝州家よりの御下知狀を取出して内藏之助に示した。此下知狀と云ふのは速かに城を明渡せと云ふ事を、御本家よ

り示されたものである。

内藏之助は篤と拜見して「御書附の御様子、確かと拜見仕りました、併し御月番御老中様お墨附ばかりにては、當城御引渡し儀も相成り兼ね候らへ共、御本家松平安藝守様より御下知狀が御座りますからは、異議なくお渡し申上ぐべし、何卒お受取り下し置かれまます様願ひます」と御返答申上ける。で茶菓の饗應をしたが、何事も質素にして荒々しき事のないのは、内藏之助が下知の行届いて居ると云ふので大層感心をした。

「只今より武器其外お檢めの上、お受取りを願ひたく御案内仕りますれば、御苦勞ながら御同道を願ひたう存じます」と内藏之助の一言。

「然らば案内致されい」と荒木重左衛門が先づ席を立つ。一同も立つて是から内藏之助自身先に立ち茅野三平、大石瀨左衛門、原惣右衛門が後に引添ひ、第一に二の

丸内の武器庫へ案内した。然るに鐵砲は残らず束としてあり、弓は弓弦を拂ひ、槍も百本づつ、束として積み重ねてあるから、一同も益々其用意の行届いたのに感心をする。是から元の座に返つて内藏之助は懇懇に、

「斯く御引渡し相濟む上は、我々はじめ只今より退散仕ります」と云ふ。

重左衛門膝を進めて、
「如何に内藏之助、此度の致方含み置いて、御老中方へ重左衛門より申上けるであらう、舍弟大學へ對し遠からず半地にても淺野家再興致したる時は、必ず其れへ仕へて忠勤を勵まれよ、何か外に願ひあらば遠慮なく申出でられて然るべし」と情けの言葉。

「厚きお言葉に預かり難有き仕合せに存じ奉りまする、御言葉に基き願ひまするは御老中土屋相模守様まで願ひまする一儀あり、願書御取次ぎ下し置かれなば、如何

ばかりか難有き仕合せに存じ奉りまする」

「其儀承知致した、願書は持參致し居るか」

「如何にも持參仕り居りまする」

内藏之助は服紗を開き、土屋相模守殿宛の願書を差出した。荒木重左衛門受取つて「相違なく取次ぎ遣はす、シテ其方儀は是より何地へ立退くや」

「只今より華岳寺へ引取り、主人の佛事を營み、其れより散々に相成りまする心底某は鹽濱村名主三右衛門方へ一旦引取り、其後は泉州境の町人天野屋利兵衛方へ引取り何れへなりとも奉公口を尋ねまする心底にござりまする」

「左様か、次第に依つたら又重左衛門も周旋いたすであらう、併し此上とも穩便を旨と致されい」

「畏まつてござりまする」と、一同の役人へ叮嚀に挨拶をして、内藏之助始め一同

は住馴れし赤穂城を退散するのだが、行儀正しく御橋臺へ出て見ると、今迄は丸に鷹の羽の定紋の幕で張詰められて居たものが、此時には既に白に黒く輪違ひの幔幕と變つて居た。内藏之助外一同は振返つて物見櫓を見詰め、暫時は涙に袖を絞つたが、遂に意を決して御菩提所華岳寺へ引揚げた。茲で懇ろに亡君の佛事供養を營みそれから互ひに後の事を約して思ひ／＼に此場を退散した。

内藏之助は一旦鹽濱村の三右衛門方へ立退き、日ならず都へ上つて山科の十善寺街道に居を構へたのは、夏の初めの頃であつた。

此山科に大石が居る内に、天野屋利兵衛に頼んで、仇討の時用ゐたる山鹿流の籠燈、小田官流の蠟燭立、飛猿の投梯子、鎖帷子、寶山流の鐵弓、一丈笹穂の槍等悉く拵へさせた。慙う云ふ大切な道具を町人風情に依頼したのは甚だ輕率のやうではあるが、全く利兵衛の氣象を大石が見抜いたからの事で、大石が人を見る明は今

更ながら感ずるに餘りある。

元來此天野屋利兵衛は、大阪北濱に住つて廻船問屋を營み、傍ら諸大名へ出入をして、生れは泉州堺だから堺には家族が居る。淺野家の倉屋敷が大阪にあつたので、利兵衛は此倉屋敷へ始終出入をして居た。

「大夫様御機嫌お宜しうございます」或時利兵衛は赤穂へ来て大石を尋ねた。

「利兵衛が能く參つた、さあ此方へ通るやうに……」と内藏之助は愛想よく迎へた。

「有難い仕合でござりまする、大夫様には何時も御機嫌克く恐悦に存じます」

「何うも大阪のやうな賑かな處に居つたらば、さぞ慙う云ふ處は寂しくて可けないだらう」

「イエ何う致しまして、私など斯う云ふ處へ偶に參りますと、氣が晴々いたします」二人は四方山の話、風流の話に耽つて居たが内藏之助は何か思附いたものと見え

「何うだ利兵衛、今日は御廣間で御寶物のお風入れがあるから、参つて拜見いたしては何うだ、一年に一度のお風入れであるから、亦と無い好い機會だ」

「それは是非共拜見致したいものでございます」と、利兵衛は悦んで頼んだ。

内藏之助は手紙を書いて渡した。利兵衛はそれを持ってお風入れの場所へ来て見ると、奥田孫太夫、三村次郎右衛門の二人が頻りに帳面を調べて居た。

「オヤ是は奥田様三村様、御苦勞様でございます」と、利兵衛は叮嚀に挨拶をする。

「イヤ誰かと思つたら利兵衛か、能う参つた」

「實は今日御寶物のお風入れと承はりました、又とない能い機會と存じ、大夫様から御書面を頂いて拜見に上りました」と、利兵衛は内藏之助の手紙を其處へ出した。

「ア、左様か、何も別段書面にも及ばなかつたのに、念の入つた事である。サア、遠慮なく拜見いたせ、我々は今御品物の帳簿を調べて居る處だから、勝手に拜見い

たせよ」と孫太夫と次郎右衛門は傍目もせず云ふ。

「有難う存じます」と云つて、利兵衛は御品物を拜見して居ると、其中に如何にも美事な御香爐があるから、手に取上げて見ると、見れば見る程如何にも美事だ。

それも其筈、此香爐は淺野家名代の瑠璃南京の香爐と云つて、餞頭形の香爐である。これを熱々拜見をして、其れから又外の者をも拜見して後、二人にも挨拶して旅宿へ歸つた。

と、一時ばかり経つて奥田孫太夫が大石の處へ慌て、飛んで来て、

「大夫、大變でございます」と色を變へて居る。

「何ぢや」

「唯今大夫のお手紙を持参して天野屋利兵衛が参りましたが、御品物拜見して後、瑠璃南京の御香爐が紛失いたしました、豈夫利兵衛が盗むやうな事もございます

まいが、那云ふ風流人だから、殊に依つたら京の清水へでも頼んで、雛形通りに拵へて、之が淺野家名代の瑠璃南京の香爐でございと、知人の者へ配らうと云ふ考へで、其雛形を取る爲に旅宿へ持つて歸つたのやら知れませんが、一應お呼寄せ下さつてお調べを願ひたいものでございます

「ア、左様か、然らば早速呼寄せて調べても見やうが、其れまでは可成御短慮のないやうに願ひたい」と、内藏之助は孫太夫を歸して利兵衛の旅宿へ人を遣はした。何事が出来たかと利兵衛は取る物を取敢へず大石の許へ罷出た。

「俄かのお召しでござりまする故、早速参上いたしましたでしたが、何御用でござりまする」

「外でもないが利兵衛、其方は最前御城内お風入れ拜見に参つたな」

「左様にござります、正に御道具拜見に参りました」

「其節お品物の内に、瑠璃南京のお香爐があつたらうな」

「左様でござります、豫て噂に名高き瑠璃南京のお香爐、誠に御美事の品ゆゑ、不躰ながら手に取上げ謹んで拜見仕りました」

「所が其お香爐が唯今紛失したと云ふことである」

「エ、ツ……」利兵衛は驚いた。

「夜分は濕氣が降りる故、御風入れの御道具だけ貴重品は箱へ入れて仕舞ひ置くことであるが、其お香爐を箱に入れんとしたるに、影も形も見えず。奥田三村の兩人も大きに當惑致して居る。然るに今日お風入れ拜見に参つたのは其方一人との事、且又其方一人にて拜見致したとの事なれば、或は其方が風流を好む餘り、密かに袂にでも入れて旅宿へ持歸り、京の清水へでも頼んで其通りに拵へさせ、好事の人に別たんとの下心から、雛形を圖面に取り、明日又元の棚へ載せ置けば好からう位で持歸りはせんかとの疑ひあり、奥田三村の兩人殆ど困却致し居るが、何うちや利兵

衛一切包み隠さず申したら宜からう、品物さへあれば格別罪とも相成るまいから」と、内藏之助は諄々として説いた。利兵衛は心中驚いたが吃と思案を極め、

「エ、大夫様に伺ひますが、若し此器が愈々紛失致しましたとすれば、奥田三村様のお身の上に罪科がありますることをごさいますか」

「それは無論の事である。役向きを疎かにいたし、大切なる品物を紛失したる科に依つて、其身は切腹、祿は召上げられるに極つて居る」

「左様なら包まず私も申上げますが、實は私持歸りましてございます」

「ナニ持歸つた……利兵衛、それは誠に不都合ではないか、何故左様な事を致す、併し今度は内濟に致し遣はすから、早速品物を差出すが可い、奥田へ渡し遣はすから」

「其御香爐は最早持参いたしません」

「エ、何と申す」内藏之助は二度吃驚した。

「實は旅宿へ歸りまする途中、水落御門の所まで参りますと、誤まつて取落し木葉微塵と相成りましたから、其儘お濠の中へ投込んで了ひました、今更ら御兩人様の御迷惑もお察し申しまするし、殿様へ對しても申譯ございせんから、私切腹して相果てますから、死骸にて御成敗を願ひまする」と利兵衛は次の間へ退つて、一刀引抜いて諸肌押脱ぎ、既に腹へ突刺さうとした。

内藏之助は驚いて止めて居る途端に、奥田孫大夫が駈けて来て、

「大夫々々、漸くお香爐の在所が知れまして、吾々一同安心致しました。實は私共帳簿を調べて居る中に、殿様がお出でになつてお持ちになつたのを少しも存ぜずに居りました處、唯今お違棚にありましたとお坊主が持つて参つて呉れましたから、何卒大夫にも御安心下さりまするやう願ひます……又利兵衛に飛んだ疑を掛けて濟

赤穂城中大評定

まなかつた、何卒勘辨して貰ひたい」と云ふ。

内藏之助は不審に思ひながら「唯今利兵衛、其方は確に持ち歸つて、水落御門の處で落して缺いたと云ふたではないか、それとも香爐の外に何か持つて行つたのか」

「イエ何ういたしましたして、實はお品物の紛失で御兩名様へ御難儀の掛るもお氣の毒と存じ、私一人にて引受けまする覺悟でございました」と利兵衛は眞顔で云つた。

町人ながら立派な覺悟に、大石は今更らながら感心して、手づから濃茶を立て、馳走をして、厚く謝罪をして歸した。で其氣象を見抜いて居るから、今度の討入道具を拵へさせようとしたが、利兵衛は快よく承諾し、自分用と偽つて職人を集め、念入りに製造を仕遂けた。後に職人から此事が知れて、大阪町奉行所へ召捕はれたが、種々拷問に掛つても一切白状はしなかつた。内藏之助が仇討を遂げたと聞いて其後始めて其實を明したから、町奉行も其志に感じて大阪、京お構ひと云ふ丈け

で事が済んだ。大石も此利兵衛があつたればこそ容易く討入の諸道具も手に入つたのである。されば四十七士の美譽が千載朽ちざると共に、天野屋利兵衛の功も没すべからざることである。

山科の浪宅

「萬山不重君恩重。一髮不輕我命輕」此語は内藏之助が平生腰に帯びたる脇差の小柄へ、自身に嵌れた象眼の銘である。斯心を以て心となし、終始一貫渝らざるの大石が、山科に移つてより以來日夜毎の遊興三昧、或は墨染撞木町、或は祇園島原を流連荒亡の樂みを肆にし、浮大盡と綽號され他より後指さるゝも恬として顧みざると云ふのも、皆これ敵を欺く反間苦肉の計であつた。後に大石が人に向つて「心にもない放蕩遊逸、手に取る盃の酒は熱湯を飲むに等しく、傍に侍る遊女

大夫は闇魔大王かと疑はれ、新造禿は牛頭馬頭の鬼とも思はれ、主人の命日に肴を喰べる心の苦しさ」と語つたと聞けば、誰か大石の胸中を察して腸九廻せざるものがあらう、されば酒地肉林の樂みも、身に漆して敵を視つた苦みも其趣こそ違へ、主君に忠義を盡すと云ふ意は蓋し同じであらうと思ふ。

内藏之助は山科に閑居して、心の中には如何なる謀略があるか分らぬが、表面には少しも其れを現はさない。只田地畑を五十石ばかり買ひ求めて子孫の計となし猶ほ其上にも高利の金を貸して利殖を計ると云ふ風に見せて居た。恰度大石の家は山科の十善寺の北の蔭の所、三十間ばかりの屋敷である。庭が廣く取つてある處から、成るべく利益になる樹を植ゑようと、柿の樹なども大分植ゑた。京都は御所柿と云つて好い柿の出る所、さう云ふやうに柿や桃や林檎と植ゑて其樹の成育を待つと云ふ。或る日近所の庄屋又は名主百姓等を大勢呼んで、池田伊丹の酒を取寄せ立

派な馳走を並べて饗應した。

「さて各々方も御存知の通り、某元來病身なれば赤穂退散の後には頭を剃り毀たんと思ひしなれど、其れにては妻子に對し如何と思ひ、餘儀なく惜からぬ命を長らへて世を味氣なく思ひつゝも此山科に住むことに致し、斯く各々方に御厄介に相成ることになりました、年老つた母親に妻、倅主税、次男吉千代、三男大三郎、其れに下男と先づ七人暮し、今後は何卒宜しくお願ひ申す、我れとても早や初老の身の上なれば、此上は百姓となつて田畑を眺め、現世を面白可笑しく暮すのは、先づ以て重疊でござる、是に居るは妻、彼れに居るは母、何うか何もござらんが、緩くり召上つて貰ひたい、又各々方のお骨折にて庭や家の周圍には柿、栗、蜜柑、林檎等御覽の如く植ゑつけ、來年からは何かしら實を結ぶこととござらうから、今より樂みに存じ居る。凡そ一年の計は五穀を植ゑるにあり、十年の計は樹を植ゑるにあり

十年の星霜を経ざれば樹木は全からんものと承はる、されど我等も幾世幾年、此山科に住居いたすことなれば、今植ゑたる此樹木が悉く實るのを、心長く樂みに致すでござらうから、何分共にお世話になります」と内藏之助は叮嚀の挨拶をした。
庄屋を始め百姓共は、

「へい恐れ入りました、貴方は元は御家老様、立派なお方様でありながら其様に仰せられるとは勿體ない、まだ坊ちやまなどがおあり遊ばすから、棕櫚の木を植ゑなさいまし、棕櫚の木を植ゑて置けば大變な利益がござります」と口を揃へて追従を云ふ。内藏之助は膝を叩いて、

「成程棕櫚と云ふものは、子供等の成人するまでには利益が多く上りませう、其では棕櫚の木も植ゑませう」と、其れから酒を飲んで四方山の話をし、一同の者は各各家路に歸つた、此噂がバツとすると、今迄は主人の敵を討たうと云ふ考へでも持

つて居りはせんかと思つてた者までが、これは然う云ふ望みもなく、安穩に世を送る意りに相違ない、彼れは君恩を忘却した犬武士だと恐ろしく悪く云ふ者もある。内藏之助は其んな事には頓着なく、撫付け頭に廣袖を着なし、無刀にてゾロゾロと何時も近所隣家を遊び歩き、又は里人に頼まれて筆を取つて何か書いてやつたりなどして、仕様ことなしに毎日酒を取寄せて飲んで遊んで居た。此家に折々来る連中は原惣右衛門、大高源吾、武林唯七、堀部安兵衛、小野寺十内などである。或時は是等の連中と京都の茶屋に密會して相談をした。然るに江戸表にては、吉良家は本所松坂町へ移つてから嚴重に用心をして、殊には御縁家の老臣千坂兵部と云ふ策士が、常に吉良家に入つて萬事上野介の世話をして居る。處が今度内藏之助が京都山科へ隱遁して、其處へ永住するやうな噂もあるけれども、此の千坂兵部は却々油断をしない、恐らく是は内藏之助が深謀遠慮の存する處であらう、先んずれば人

山科の浪宅

を制すと云ふから、早く彼れが様子を探らねばならぬと、愈々間者を放つことゝなつた。此間者選ばれたのが上杉の家中で猿橋右門と云ふ者である。

「お手前は迷惑でもあらうが、大石の腹の中を探つて来て貰ひたい」と、云はれて右門は暫らく考へて居たが、

「委細承知仕つた、及ばずながら拙者大石の本心を探つて参るでござらう」と請合ひ、金子五百兩を懐中にして江戸表を發足し、東海道を経て京都に入り、是から毎日京都近邊山科近邊を彷徨つて大石の様子を窺つて居た。

然るに江戸表に居る磯貝十郎左衛門が此事を探知して、大石の許へ細々と書面に認めて申送つた。さてこそござんなれと大石は、急に放蕩を始めて今日は祇園明日は島原と浮れ歩く、其中にも撞木町の井筒屋と云ふ家に來ては贅を盡した。

「さあ貴方はんお二階へお上んなはれ」女に手を取られて内藏之助は井筒屋の二階

をトン／＼と上つた。連れ立つて來たのは原惣右衛門、大高源吾の兩人であつた。

「イヤ此處が可い／＼」と、内藏之助は表二階の一室へ陣取つた。

仲居共は黒天鷲へ金糸の縫模様のある半襟をかけ、凡て京の艶衣裳、ヤンヤと騒ぎながら酒肴を持つて出て來る。

「さ酒々、早く酒を持つて参れ、美しい娼婦があるなら是へ連れて來い」と内藏之助はまづ先に座を構へる。

「太夫はんに致しませうか、おやまはんに致しませうか」

「同じなら太夫にしやう、太夫を呼べ、太夫を呼べ」と内藏之助は盃を舉げる。

「アイヤ御酒だけに致して、太夫は招かずに歸ると致すでござらう」原惣右衛門は苦々しい顔で立掛りながら云ふ。

「まゝ左様な事を申さずに先づ緩りと致したが宜いわ」斯う云つて内藏之助は惣右

衛門を引止めた。

「なあ偶には藝妓を集めて酒飲むも宜からう……藝妓はまだ参らんか」

「アイ」と仲居共の起たうとする所へ、綺羅びやかなる元祿模様の衣類に縮緬の襦袢を着て、髪を兵庫に結つた妍かな女が現はれた。これは今撞木町で名高い全盛の浮橋太夫、今一人は御園と呼ぶ太夫である。惣右衛門と源吾は思はず座を退つた。内藏之助は笑顔に迎へて「オウ浮橋か、久しく逢はんぢやのう、客が三人で二人の太夫とはこりや何うした事ぢや」

「アイ、今浮舟はんが見えますがな」

「ア、然うか、イヤ浮舟は年が若いから源吾に宜からう。サ何か歌でも賑かに唄ふたら宜からう、サア唄ぢや唄ぢや」と内藏之助は上機嫌。

惣右衛門と源吾とは苦々しい顔はして居たが、酒が廻るにつれて陽氣になつて來

た。これから幫間末社をあけて飲めや唄への大騒ぎ。と、此時隣座敷から、

「ヤ、お美事々々、天晴れお美事……」と云ふ者がある。

「ヤ、誰か知らんが大層もなくお譽め下さつて辱けない、何はなぐとも一獻差上げたうござれば……」と内藏之助は立つて襖を開けた。

「イヤ此方に於てもお相手を致したい、御免下さい」と遠慮もなく入つて來たのは年齢三十有餘、黒五ツ紋の羽織にお納戸博多の帯をした立派な人物である。

「ヤ始めてお目に掛る、承はれば足下が當時山科に閑居致される大石内藏之助殿でござるとの事、兩刀も帶されず藝妓太夫を相手に大盡遊び、イヤ何うも御全盛、お羨ましくござる。拙者は江戸武士前野平内でございます」

「これはく、貴方は江戸のお方でござるか、拙者は内藏之助と申する者、以前は是でも武士の端くれであつたが、今は山科の百姓、勤職執つて世を送る身の上であり

山科の浪宅

ながら、遊女買ひとは少しく面目ござらん、これに居るは原惣右衛門、大高源吾、サ甚だ失禮ではござるが一獻差上げるでござらうから、此方へお相手の太夫殿をも召連れなされては如何」

「それは拙者も望む所、然らば御免蒙つて御一緒になつて飲むでござらう」と、平内は己が敵娼の御幸太夫を伴ひて内藏之助の座敷へ来た。仲居共は料理などを運び入れる。

これから猶一層大騒ぎをやつたが、内藏之助は豫て磯貝より書面の間者上杉の臣猿橋右門ではあるまいか、人相の似て居る處と云ひ、又先方より言葉掛けて我が方へ来たりし様子と云ひ、正しく我が舉動を探る爲めの間者に相違ないと早くも見抜いた炯眼、それとなく大高に目配せをした。源吾も其れと悟つて、

「イヤ拙者酔つて心地爽かならざれば、暫時御免を蒙る」と云ひ紛らし、密かに次

の間へ立つて内藏之助と前野の間答を筆記した。これは果して前野が敵の間者であるかないかを確かめんため、且又後日の参考にしよとの考へであつた。これから内藏之助も前野も四日程流連して大豪遊をした。で最早井筒樓も飽いたからと、

「如何でござる、是から笹屋へ参つて遊ばうではござらぬか」と内藏之助が云ひ出した。

「イヤ其れは面白からうが、併し内藏殿、笹屋で遊ぶよりは此遊女共が、大分祇園へ参りたいと申して居るから、是から女共を引連れて祇園八阪神社へ参詣を致さうではござらぬか」と前野は女共を顧みて云ふ。

「浮殿、是から仲居達も連れて祇園へ参らうぢやさかい、能う連れて行つてお呉りやはれ」浮橋太夫も口を揃へて云ふ。

「フム、それは成程面白からう、では参らうか」

内藏之助が承知したので仲居共は大喜び、一層綺羅美やかに着飾つて拜問末社を引連れ、サンザめかして練出した。途中は大騒ぎ宛でお祭騒ぎのやう、是から八阪神社に参詣して、まだ早いからと圓山へ登つて智恩院の境内へ入り、山門を見て日の峠へ出て、其れから三條通りへブラ／＼と掛り、大橋を渡つて寺町から四條の大橋を再び祇園新地へ真直に、一カと云ふ揚屋へ行つて、又もや酒肴を取寄せて飲めや唄への大騒ぎ、其れから井筒樓へ立戻つたが原惣右衛門、大高源吾の二人は宿醉の頭痛鉢巻、座に居堪られなくなつて立歸つて了つた。大石も大酩酊ゆる一旦家へ歸らうとする。内藏殿、大層御酩酊ゆる駕籠で送らせませう」と前野が蹠蹴く内藏之助を支へながら云つた。

「イヤ駕籠には及ばんが、貴殿も拙者と同行なさい」と内藏之助は前野の手を取つて引く。

「イヤ御同行致すことは御免を蒙らう」

「其様な事を仰せられんで、まづ拙者と同行なさい、拙者山科の浪宅へも些とお出で下さい、さア其んな事仰しやらずに御同行なさい」と無理に手を取つて内藏之助は引立てようとする。前野平内は胸に一物ある事とて却つて喜んだ。

「然らばお送り申上げるでござらう」と、供をも連れず只二人、前野は大石の手を取つて井筒樓を立出でた。

内藏之助は大酩酊ゆる足の踏度も定まらず、前野を力にして漸うに歩いて居る。前野は心中に斯様な大白痴者があらうか、千五百石と云ふ大祿を頂いて代々君恩に浴して居りながら、君の切腹を餘所に見て、放蕩のみならず此爲體は何事だ、此様

な呆痴者をば怖れたまふ千坂兵部殿の御心底が分らんと、既に内藏之助の術中に陥つた前野は、どりや一つ試してやらうと、

「内藏之助殿、世の噂にてはお身は大層な御器量人、前代未聞の城明渡しをなされ其上時を待つて主君の仇討をなさん御計畫との由でござるが、全く其んな事がござるかな」と云つて顔色を窺つた。

「ハ、左様さ、其んな事は國を出る時には随分思ひ立つた事もあるが、今は其様な事考へると馬鹿らしうて堪らんわい、美やかな婦人を擁して酒飲む老後の楽しみ最うく敵討ちなどと其様な事は聞くも厭ぢや。さ、前野氏、此峠一つを越えれば最早浪宅、何うかお立寄りを願ひたい」と内藏之助は氣輕に云つて除けた。

「イヤ大石氏、甚だ失禮ではござるが、是で拙者は御免を蒙ります」

「前野氏、暫らく待たつしやい、恚んな事なら駕籠を雇うて參れば宜かつたに……」

ま、其んな事云はずに浪宅までお出で下さい、拙者の宅を御覽に入れらから」

「折角ではあるが、拙者少々用事もござれば、失禮ながら御免を蒙ります」と前野は袂を拂つて日の峠で別れた。で峠を下る態をして物蔭で窺つて居る。

内藏之助は踏々踵々として千鳥足、山科さして行き掛けたが、峠を向ふへ下る途端、大溝の中へホチャリ片足突込んだまゝ、大地へ横はり前後も知らぬ高駈、前野は是を見て益々呆れ、密と峠を下つて来て、拔足して内藏之助の傍へ寄り、帶して居る一刀を抜取つて見ると、氷の刃と思ひの外眞赤に錆た赤銅。

「ウム……千坂殿は大層御苦勞なさるけれど、其れ程に苦勞する人物でもない」と、其儘前野は我が宿所へ歸つて来て、詳しく書面を認めて千坂兵部の許へ送つた。

其文意は恚うである。拙者儀貴命に依り京都へ上り、只管内藏之助が舉動を探索いたしたる所彼れ全くの遊蕩漢にて、日毎夜毎狭斜歌吹界裡へ出入なし遊女傾城を

相手として遊び戯れてのみ居る。既に今日も拙者彼れを浪宅へ送り参つたる處、大醉の餘り大溝に片足を踏入れ、其儘前後も知らず大地へ打臥し高野の體ゆる、拙者彼れの大小刀を抜き取り改めたるに、中身は武士にもあるまじき赤鯛、實にく、呆れ返つたもの、最早彼れ内藏之助儀に就ては御心配もあるまじと思はるれば、今兩三回彼れの心底を試したる上、拙者も歸邸いたすべし云々……。

斯くまでに計つた内藏之助の苦心は生やさしいものではなかつた。猿橋右門はマシマと欺かれて慍う云ふ書面まで出したが、茲に油断のならぬ一事が起つた。それは薩州家の臣に村上喜剣と云ふ者がある、京都四條の薩州家屋敷に滞在して居る時、内藏之助は山科へ閑居した。世の噂に大石は主恩を忘れた犬侍、畜生武士と蔑む中にも、獨り村上喜剣は頭を掉つて大石の心の底は分るまい、自分の心眼を以て見る時は唐と倭に只二人晉の豫讓か内藏之助か、今に見よ二百六十餘大名旗本八萬騎の

肝を寒からしめるのは大石内藏之助だと賞めちぎつて居た。

或る時喜剣は所用で日の峠の邊りへ來掛つた。すると内藏之助は片足を大溝の中へ入れ、大醉して前後不覺に大地へ伏臥して居た。これは大石が猿橋右門に別れた直ぐ跡の事であつた。此有様を凝と見て居た喜剣は、

オウ、内藏殿か、お起き下され、お覺し下されい」と肩に手を當て二三度揺りながら起した。

内藏之助は醉眼を見開いて「誰方でござるな、拙者今日大酔いたして失禮仕つた」と云つたのみ、又もグウ／＼高野。喜剣はニッコリ笑ひながら、

「成程内藏殿の御苦心察し入る。拙者は御懸念な者にてはござらぬ、薩州家の臣村上喜剣と申す者、内藏殿の御本心打明けて下さらば重疊でござる。な、決して他言致すやうな拙者でない……」とは云つたが茲は往來、豈夫路傍で慍うと打明ける事

も出来まいと悟つた村上喜劔、何か頷いて内蔵之助の大劔を取つて抜放ち、見ると真赤に錆た赤劔「フム……拙者の眼識は違はぬな、敵を欺く爲めに御苦心せられたものと見える」と獨言つゝも、短劔を取つて抜いて見ると是も真赤に錆て居る。是を見ると流石の喜劔目尻をキリ、と吊上げ口を結んで怒りの形相怖ろしく、脇差を鞘に納めて突如足を上げて内蔵之助の肩の邊を二三度踏躡つた。

「ヤイ起きろ大侍、今の今迄其方は昔の豫讓の轍を履み、内匠頭の志を相續して、天晴れ忠義の名前を上げる者と心得しが、此脇差を見るに及んで仇討の心の無いのが分つた、譬へ刀は錆さしても脇差は其方の魂、それを錆させるやうな大侍に、主君の仇を報ずる事が叶ふか、それを今迄賞めて居た此喜劔は盲目同然、此上は汝の素首打落して申譯いたす、サア立上つて勝負いたせ」と又二三度踏躡つたが、いつかな起きればこそ内蔵之助は、グウ〜高軒で寝て居る。

「コレヤイ起きぬか、呆痴た奴だ。寝て居る者を斬るは死人を斬るも同然、薩摩武士の村上喜劔は死人は斬らん、生命は其方に當分預けて置く、エ、云はう様なき犬侍め」と、喜劔は怒りに任せてカツと痰を内蔵之助の横面へ吐き掛け、其儘苦笑ひをして此場を立去つた。

此村上喜劔は其後江戸表へ出府したが、後に大石が仇討をして泉岳寺で切腹したと聞き、始めて内蔵之助の精神を知つたが、斯様な忠臣の面上へ痰唾を吐掛けたるは如何にも相濟まんと云ふので、泉岳寺の大石の墓前で己も腹搔き切つて果てたと云ふ。

内蔵之助は喜劔が立去つた跡、ムツクリ頭を擽けて起き上り、
「ウ、イ……誰だ浪人しても大石内蔵之助、其れを踏んだり蹴つたり、剩へ横顔へ痰を吐き掛けるとは無禮の奴だ。ア、村上喜劔とか申する人は短氣者と見える、大

層怒つて行かれたな……』と四邊を見廻した内藏之助「武士の愛身の果ての捨所、さりとて照す朧夜の月……ア氣の毒な村上氏は、内藏之助を犬侍と思つて下されしか、此様子では遠からず本懐成就致すであらう」と獨り喜ぶ内藏之助、其儘山科の住居へ歸り着いた。

連判狀破り

江戸表上杉家の間者猿橋右門は、大石の放蕩の態を見て全く仇討の心底無きものと思ひ極め、立歸つて千阪兵部に此趣を詳しく物語つた、兵部は却々の人物であるから油断をしない。今度は更に野山喜内と云ふ者を間者として京都へ差廻すことになつた。此喜内と云ふ者は又却々の人物。此事も丁度江戸表に居た堀部安兵衛が探知し、急ぎ京都へ立歸つて内藏之助へ注進した。

其後内藏之助の放蕩は一層激しくなつた。此頃では井筒屋の浮橋太夫を愛するどころではない、既に溺れるといふ形になつて、或時は花駕籠を拵へ、それに浮橋と合乗をして廓内を練歩かうといふ始末である。會々宅に歸つた節は、酩酊の餘り自ら三味線を取つて爪弾をするとか、其頃有名の畫家菱川師信に描かせ、浮橋の繪姿を床へ懸けて餘念もなく見惚れて居ると云ふ、實に分別盛りの男の舉動とは思はれぬ位である。

「御老母様が何か御用でございますから、彼方にお越しを願ひます」と、奥方が來て前へ手を仕へる。

「オウ母上が、何の御用か、お招きとあらば眞逆に此姿でもお目に掛られまい、衣類を持って」と内藏之助、聽て繼上下を着けて行儀正しく容姿を改めた。流石世にある時は千五百石赤穂の城代家老、併し急に酒氣を醒ますことは出来ない、眞面目な

顔で母の前へ出た。

「何の御用でござりませうか、伺ひます」

「内藏之助、些と申したい事のごさいます、此方へ……嫁女其邊心注けを頼みます」

と老母の聲に、立つて奥方は四邊を見廻したが、

「誰も居りませぬ、お心置きなく」と其傍へ座を据ゑた。老母の傍には悴の主税、

大三郎も坐つて居る。

「さて内藏之助、申すは餘の儀でありませぬ。今日其方へ尋ねますが、昨年三月御家の騒動、赤穂に於て一同籠城と聞きましたが、其れも無く、殉死切腹してとの取沙汰も立消えとなり、城も公儀に返上して其後何事もないのは、全く殿様の討漏らされた吉良殿を討たんが爲めと思ひます。それに就て其方の放蕩遊逸、これも全く敵を欺く爲めとは申しながら自らも心配いたします。近頃の放埒段々に身を持崩し

まするは、萬一本心放埒ではあるまいかと、女と云ふものは誠に取越し苦勞を致します。尤も吉良殿には上杉家と云ふ後楯ある容易ならざる大敵、其れを欺かんが爲めの反間苦肉の策とも推察いたして居りますが、老人の心休めに其方の内意を明して貰ひたい、仇討ちは何日頃でありますか」と老母は聲を密めて訊ねる。

「ハツ／＼ハツ、何事のお訊ねかと存じましたれば、思ひも寄らざる其お尋ね、お言葉の如く昨年赤穂退去の節は、汝吉良殿をとほ思ひ詰めました、段々江戸表の風聞、吉良上杉御兩家の様子を窺ひますれば、誠に要心嚴重にして、我々共敵討なぞとは云ふべくして行はるゝ事でごさらず、萬一左様な事外聞と相成りますれば一同お召捕となり、天下の御處刑を受けねば相成りませぬ故、これは思ひ止まりまして此上は亡君の菩提を弔ひ、萬代不易當地に住居を致し、未までも楠大盡と人にも云はれたく、猶亡君の御跡相立つやう世の成行を相待つ外なしと決心致しました。

此上は御老母様にも左様な事の御心配は御無用に遊ばして、唯亡君の御回向二つには後生を御願ひなさるがお宜しうござりませう」と云つて内藏之助は、母の顔色を窺つた。

「イヤ其れは全く偽りでありませう、先立たれた頼母殿、備前岡山より其方十五歳の時養子に貰ひ受け、手許に養ひました故御身の行ひは大抵私も心得て居ります唯女に斯様な事を口外いたせば大事の漏れもやせんといふ心から、眞實を明さぬものと見えます」

「何と御疑ひ遊ばしても、全く左様な事はござりませぬ、平に御勘辨を……」内藏之助は疊に手を突いて頭を垂れる。

「さらば一層疑ひを晴らす爲め猶訊ねますが、赤穂城にて連判状を認めて五十餘人が神に誓ひて血判致された彼の神文の事は如何であります、豈夫天地の神に誓つ

た事は反古とは申されまますまい、其事略此母も推察いたして居ります」恚う老母に突込まれて内藏之助は、疑心より出でたることか、又はこれを確めたる事か、星を指されて心中に、南無三、上杉家を欺く爲めに本心放埒と見せ掛け居るに、今老母に我が決心を見透かされて驚く如きは、我れながら愚の至り、斯く老母に推測されるやうでは、上杉家では愈々内藏之助を疑ひ、益々用心堅固のものであらう。殊に同志の外親子兄弟夫婦の仲と雖も口外すべからざるの神文、頭領たる内藏之助が母に事を打明け、妻子に内實を明す如き事あつては、五十餘人の人に申譯かない。恚う思ふと流石器量人の内藏之助も殆ど當惑したが、左あらぬ體にて、

「アツハツく、イヤこれは恐れ入りたる其お言葉、さてこそ最前より何か深くお疑ひの様に心得て居りましたが、何様彼の神文あるが爲めに、益々内藏之助をお疑ひ遊ばすと存する、彼の連判は斯様でござる、赤穂城にて金子配當の節家中總集會

せし者が二回目の評定の節は残り僅か五十二人、さて殉死切腹いたさんなどと云ふ輩もありましたが、拙者考へまするに死は易く生は難し、同志が殉死いたすと云ふを、何卒して此難を遁れんと存じましたるが、城代家老たる身分を以て、イヤ殉死には及ばぬ、城を明渡さうとは申されませぬ、據なく仇討と策を設け一時の難を遁れましたる次第、又仇討は致さぬものと思ひ定めし以上は、有つて益なき連判状御疑念を晴らす爲め……主税連判状を是に持て」
深く秘してある連判状を取出して來た主税良金、父の前へ差置いた。内藏之助は取上げて、

「母上御覽下さい、斯の如くでござります」とサラ／＼と開くと五十二人の連判、差裏の小刀を抜取つて大石内藏之助良雄、主税良金兩人の名前を切抜いた。
「これを以てお疑ひを晴らして下さいませ様」

狂人とも白痴とも云ひ様のない仕打に、老母も奥方も唯茫然として内藏之助の舉動を見詰めて居る。

此時次の間で最前からの舉動を見て居た武林唯七、元來忍耐の乏しい人物だから齒を噛み、拳を握つて憤慨して居る。

「コレ竹林居るか、唯七居るか」と内藏之助の聲。
「ハイ、是に居ります」と躑り出た。

「其方太儀ながら、この連判状を持つて京都油小路、小野寺十内方に參つて黨中を集め、さて先頃赤穂城にて御約束せし敵討の儀、都合あつて思ひ止まるに依つて、各々連判の名前を切抜くやう、然る上は主取り仕官致すなり、分銅衡の目をせよるなり隨意に致し、各々覺悟を致すが宜しい、内藏之助も斯の如く名前を切抜いたと宜しく申し置いて參れ、早く行け」

その時唯七は内藏之助の顔を凝と見詰めて居たが、物をも云はず連判狀を引攔み大石の屋敷を飛び出し、京都油小路の小野寺十内方に駈着けた。

「さて小野寺、一大事出来致した」唯七は坐りながらに云ふ。

「何だ慌て、一大事とは……」と十内も眼を睜つた。

「頭領内藏之助發狂いたしました」

「ナニ發狂する様な少量な御仁でない、何と致した」十内は偽りであらうと笑ひながらに訊ねる。

「實は只今御老母に本心を糺され、内藏之助殿は敵討つ所存なしと斯く連判狀から名前を切抜かれた。で一同にも名前を切抜くと斯様申す……」

「フム、其れは一大事ぢや、然らば同志を集めて相諮らう」

十内も慌て、廻章を出した。其折京都に居合せたのは堀部安兵衛、間喜兵衛、

同重二郎、吉田忠左衛門、同澤右衛門、勝田新左衛門、杉野十平次、岡島八十右衛門、岡野金右衛門、同九十郎、三村次郎右衛門、矢頭長七、同衛門七、潮田又之丞、貝賀彌左衛門、矢田五郎左衛門、木村岡右衛門、小野寺十内、同幸右衛門等であつた。此二十人が集會した時に武林から仔細を物語つた。

聞いた一同は齒を噛み肉を動かして無念の形相怖ろしく、
「さてもく、人面獸心と云はんか、否獸類と雖も養はれたる人の恩は知るものなり彼れは獸類に劣つた卑劣漢、ヨシ其儀なら一同是より山科に斬込んで、大石親子をズダ／＼に致し五臟六腑を引抜いて、我々の腹を癒さん」と一同追取刀で立上つた。

此時堀部安兵衛は何思つたか、側への柱に凭れて莞爾して居る。
「堀部起たぬか」と十内の聲。

「安兵衛何と致した、立たんか堀部」一同は聲を揃へて云ふ。

連判狀破り

「イヤ拙者は御免を蒙る、左様な過激粗暴な舉動は平に御免を蒙る」と云つて安兵衛は一同を見渡した。

「イヤ平素腕自慢の其許が此場に及んで御免蒙るとは臆れたか、大石を左様に怕れるのか」岡野金右衛門が進み出て云つた。

「拙者平に御免蒙る」

「然らば何と致す」

「されば、大石殿から連判状を切抜いて了へ、敵討の儀は思ひ止まれと云ふお傳へであるなら、其意に従つて各々名を切抜くまでのこと」安兵衛は言葉靜かに恚う云つた。

「さては足下も五臟六腑が腐つたな、不忠不義の人非人奴、申條に依つたら内蔵之助より先に汝を斬つて血祭と致すぞ」耐へ兼ねて武林が刀に手を掛け睨み付けた。

「ハ、ア此安兵衛を斬るか、こりや面白い、サア斬るとも突くとも随意にさつしやい。全體各々方の心得が分らぬ」

「何と致して分らぬ、汝如き五臟六腑の……」

「イヤ五臟六腑は腐らぬ」

「變心致したな」十内が又口を出した。

「變心も致さぬ、一度誓つた事は安兵衛心魂に徹して居る。が、此中には年輩の人も多くありながら、餘りと申せば粗暴千萬、各々方昨年赤穂城にて大石殿に誓ひを立つた事を御失念なされたな、第一大望思ひ立つてより大石殿指圖に背かざるべき事、第二親子兄弟夫婦の間と雖も是を漏さる事、第三同年同月同日同刻に生まるゝ事難しと雖も、同月同日同刻冥府に赴かんと云ふ、大石殿に誓ひを致せしこと豈夫お忘れはなさるまい。然らば内蔵之助殿が連判状を切抜けと仰しやれば、命令

連判狀破り

であれば背くの道理なく、其指揮に従ふこそ宜けれ。又大丈夫たる者が一度約を結びしなれば、譬へば連判状はあらうと有るまいと、是等のもの強ち宛になるには及ばぬ。連判状に名前が書いてあるから斯く行らねばならぬ、それに名前が無いから行ふに及ばぬなどといふ、連判状の爲に束縛られて何と相成る。縦し又内藏之助殿が本心放埒にして、全く仇討の念思ひ止まつたとあらば、三年五年経つても未だ時期到らずと延ばすが定、八年十年と年月を延ばし、其結果一同の勇氣の挫けるのを待つならば卒知らず、即座に連判状を切抜けと命じて寄越されたるは、其間に何か仔細のあることならん、多くは我々共の胸中を試さん爲めの事と存せらるゝ。又内藏之助殿が本心放埒は敵を欺く反間苦肉の策なるか、又は同志の胸中を試さん爲めかは、兎に角明日明後日まで此安兵衛にお任せなさい、何れ安兵衛内藏之助殿の眞意を確めて、其上各々方と御協議申すでござらう。全く大石殿が本心放埒ならば各

各方の手は俟たず、不肖ながら此安兵衛、内藏之助殿を一刀兩断に致し、自分江戸表に下り亡君の仇を報じ参らせん。善悪共に今兩三日の間御猶豫を願ひたい、御一同御所存如何でござる」と理を盡して説いた安兵衛の一言、返す言葉もなく一同は逡巡した。

「如何に武林氏、内藏之助殿が如何なる手續から連判状を切破つた。又如何なる次第より御身に此連判状を持たして、一同に申傳へよと仰しやつた。その邊の始末を話さつしやい」と安兵衛は又突込んで恠う武林に訊ねた。

唯七は一伍一什を詳しく話した。安兵衛は莞爾して、
「それ見給へ各々、一も二も云ふべからず、御老母の爲めに事を看破られたるが耻かしく、飽まで其眼を眩まささんが爲め斯る始末と相見ゆる、最早其れにて疑念を晴されよ、却々我々の量る如きものではない」と流石安兵衛は内藏之助の心中を推察

して一同を諭した。一同は道理と云ふ中にも岡野金右衛門、俵九十郎の兩人は、「イヤ安兵衛の申する處甚だ手緩し、明日明後日と申しては待遠である。且つ彼の人我々を小兒の如く心得て居る。如何に萬事内藏之助殿の指揮に従ふべしと云ふ契約を致したと云ひながら、餘りと云へば無作法である。充分實否を質さねば相成らぬ」と、素より忠義鐵石の如き兩人は、一同の止むるを聽かず袖を拂つて飛び出したが、一先づ我が家へ立歸つて「コレ俵、槍を用意致せ」

金右衛門は九十郎に槍を携へさせ、禪十字に綾取つて汗留めの鉢巻をし、股立高く取上げて立出でた兩人。

「お父上、先づ大石の住居へ参りましたら、篤とお見届け遊ばした上、お乗込みがお宜しうございます」と九十郎の一言。

「ウム私も然う思つて居る、若し不在へ斬込むも呆痴千萬、庭の生籬から見れば能

く分る」

金右衛門と九十郎は人目を忍んで内藏之助の住居へ来て、生垣の破れから密と覗いて見ると、内藏之助は唯一人三味線を手にして、しだらな風態で爪弾をして居る。其前には俵主税良金が手を仕へて何か云つて居る様子。

「コレ、俵、犬が居るぞ」と金右衛門は窺ひながら小聲で云ふ。

「お父上、小犬も居りまする様子」

「左様ぢや、何だ那の三味線を抱へて居る態は、エイ今は用捨ない、直ぐ踏込んで一刺に突通して了へ」と、金右衛門は裏門から密と忍び込んで猶も様子を窺ひながら「コレ、俵、小犬が何か喋り居るわい」と耳を澄して聞くと、此方は主税良金が内藏之助に向つて、

「お父上、最前より申す通り、貴方のお心には天魔鬼神でも魅りましたか、お情け

連判狀破り

ない心にお成りでございます、武士ともあらう者が三味などを手になされ、井筒樓の浮橋と一力の茨木大夫とを身受けなされ、兩手に花と眺めんなどと飛んでもない事をなされます、其れに先程は大切な連判状をお破りなされ、父上と私との名前をお削りなされたは何事でございます、同士の面々は父上を犬畜生と呼はり居りまする、勿體ないが私の目からも犬武士と見えまする、父上と同様に連判状から名前を抜きますれば忠義の道が立ちません、併し又お父上のお心に従はずば孝道が立たず、忠孝全ふする事が出来ませねば、一層死んだが増でございますから、父上御免遊ばせ、一足お先に冥途へ参ります」と、主税は諸肌押脱いだ。内藏之助は暫時と止め四邊に氣を配りながら、

「コレ主税、其方の眼にも此内藏之助が犬侍と見えるか」
「如何にも犬侍に相違ございません」

「フム、其方の眼からも犬侍と見えるかな、犬侍と見れば結構ぢや、悦べ主税吉良殿の御首級は良雄の手に戴いたも同様ぢや」と内藏之助は莞爾して云ふ。
「エツ、何を仰しやいます」

「實は主税言つて聞かせるが」と内藏之助は小聲になり「拙者の東下りも近々と相成つた。されど同志の面々として油断の出来ぬ事なれば、今朝母上のお言葉を幸ひに連判状を切破り、諸士の心態を試さん計略であつた。殊には又江戸表よりは再び猿橋右門と云ふ間者の入込み居れば、旁々以て敵を欺くの必要もあり、心にも無き放蕩三昧、晝は島原祇園町、夜は墨染撞木町と麻通ひに心を狂はせ、傾城遊女に戯れ藝妓末社を集めての大愉快も、是皆一つの計略である。されば我が心中には、上る布團は針の山とも思はれ、牛頭馬頭の鬼に圍まれて閻魔大王に弄ばれ、焦熱の血に等しき酒を飲むも皆忠義の爲ぞよ、少しは内藏之助の心中を察して呉れ、珍味佳肴

連判状破り

は食へども、日々に瘦せ衰へるが目に着かぬか。されど是も殿様のお爲めと思へば我慢の出来ぬこともあるまい。コレ主税、猶此上にも如何なる事を致すや知れず、義理ある母親も、最愛の妻も場合に依つては遠ざけねばならぬ事もあるぞよ、其時には汝も我れと共に心を一にして、決して此事少しも顔に出してはならぬ」と、始めて明かす父の心底、主税は今更面目なく、諸肌押入れて両手を突いて平伏した。これを立聞いた岡野金右衛門、アツと思ふと其儘にウーンと俯向に反り返つた儘氣絶して了つた。是は屈死と云つて、今迄内蔵之助を憎いくと思つて居た處を、上野の白髪首は我が掌中にあるも同然と、心中を悉く打明けて苦心の様を語つたから今まで張詰めて居た氣が一時に抜けて、思はずアツと云つた儘息絶えたのである。九十郎は大きに驚き、思はずも大聲を出した。と此聲に大石も驚いて飛出して来て事情を聞いて内蔵之助は、今更ながら岡野親子の忠義の心厚きに感服をした。

それから種々と介抱をしたが、惜むべし金右衛門は遂に蘇生しなかつた。其中に同志の面々が集つて来て氣の毒に思ひ、金右衛門の死骸は山科の金剛寺へ葬つた。江戸からの間者が入込んで容易に立去る模様も見えないので、内蔵之助は茲に一計を考へた。それは外ではない、あるまじき事をして敵の間者の眼を晦まさうと云ふのである。で、其放蕩は極度に達して山科の家へ戻るのも偶である。

「コレ只今立歸つた」

我が家の門前で聲を掛けるのも酒に舌は纏れて居る。内蔵之助は跟めきながら玄関關を上つた。

「これはお歸りで御座います。アレお危うございます」と奥方は出迎へて後に引添つた。

「ウム、酔つたく」

連判狀破り

内藏之助は部屋へ入ると、其儘大小を投出して高軒で寝て了つた。奥方は小搔巻を持つて来て内藏之助に掛け、枕をさせて其寝顔を見入つた。と、暫らくすると内藏之助は起直つて、

「コレ、水を持って」と云つて四邊を見廻した。

「ハイ只今……」およしは水を侷めて「お目が覺めましたか」と靜かに其顔を見た。

内藏之助は水を一口飲んで「ア、よし、是は大酔した。拙者はまだ島原に居ると思つて居たに、其方の水を貰うて誠に心地が悪い。ア、此間中から申さうと存じながら、ツイ話をしなかつたが外でもない内藏之助も今日は浪人の身となり、日毎に遊ぶ島原通ひ、苧藻太夫の申すには何卒妻にして呉れいと強て申すに付き、近々太夫を身受いたし宅へ引取るゆゑ、左様心得て貰ひたい、彼れは廓に育ちし者、家事萬端は不案内なれば、何事も其方が召使ひ同様に附いて居て、世話致さねばなら

ぬぞ、水仕事も其方の役、苧藻太夫を大事に致さんければ内藏之助申分があるぞよ」と云ひ渡した。

「これは怪しからぬ事を仰せられます」とおよしは膝を進めた。「私も京極家の家老石塚源吾兵衛の娘でござります、一夜の中に源平藤橘四姓の者に枕を交す浮川竹に勤めをした苧藻太夫とやら云ふ者に、召使はれる覺えはございませぬ、御酒機嫌かは存じませぬが、重ねて左様の事は御無用に願ひます」

「コレ酒の機嫌で申すのではない。四十に餘る内藏之助、老の樂みに苧藻太夫の身受を致し、手活の花と眺め様と思ふに其方の申分其意を得ず、女と云ふものは子供を作つて了へば跡は入用のないものだ、第一皴は寄るし髮容姿も昔に變り窶れ果てたる姿を見ると、酒も旨くは飲めぬものだ。苧藻太夫の世話を致せと申すのが分らぬか、出来ぬなら内藏之助宅へ置く事は相成らん、唯今より離別いたす、勝手次第

に出て参れ』

常に變つた良夫の言葉に、およしは泣くに涙が出ぬ位、袂を嚙緊めて突伏した。此時襖を開けて入つて来たのは内藏之助の母であつた。

『よし、先刻からの事は襖の蔭で聞きました、嘆くは道理なれど何事も此母に任せ置きなされ』と云つて内藏之助の傍へ坐り『是は内藏之助殿戻られましたか、今聞いて居れば苧藻太夫とやらを當家へ引取るに付きよしを離別すると云ふ事、察するに江戸下向の支度も整ひ、それ故妻子に別れる其方の心底と推察しました。母の言葉よもや相違はあるまいな』

『へエー何で江戸へ下向を致しまする』

『コレ餘人は兎もあれ此母まで欺かうといやるか、私も大石頼母の妻、年老ると云へど其邊の事は能う辨へて居るぞよ、冷光院様の思召を相續いたし江戸表へ下向を

遂げ、吉良上野介を討ち取り其首級を御靈前へ供へ泉下の殿様に御満足をさせ参らする心底と疾より知つたる母、藝妓末社に取巻かれ酒に其日を送ると雖も、日毎に衰へる其方の有様、心の中を察し入り泣かぬ日とはない位、妻を離別といふからは江戸へ下向の支度整ひ遠からず仇討致すに相違ない、老先短かい此母に安心させらるも一つの孝行、いつが仇討の當日と一言聞かして貰ひたい』と老母は涙まじりに慙う聞いた。

『これは迷惑千萬、敵討を致すの殿の思召を相續いたすなごとは思ひも寄らぬお言葉、別して仇討を致すと云ふ心底は微塵も御座らん、よく物を考へて御覽じろ、僅か一時か半時の御辛抱さへなされば五萬三千石の御家は無事に済むものを、御短慮な御氣性とは申しながら、殿中で刃傷なされた爲に家は斷絶御當人は切腹、別にお氣の毒とは存じません。又敵討の心底も全く無いでは御座いませんが、吉良には上

杉といふ大家を控へて居りまして、却々瘦浪人の四十や五十如何に結束致せばとて表門一つ毀す事も叶ひません。仕損じて物笑ひにならうより此山科へ住居を求め、安々其日を送り榮華に暮すが當世と存じます。母上必ず右様の事は御無用に願ひます」と云つて、内藏之助は空嘯いて居る。

「コレ未だ然ういふ事を云つて居なさるか。殿様御生害の時も御舍弟大學様や御臺様へも一言の御遺言もない、中に其方へは吳々の御遺言、其事を豈夫忘れは致すまい、一時も早く仇討つて殿の御心の休まる様に致して呉りやれ」

「イヤ其れは出来ません、又考へても見ますれば吉良殿はもう六十に手の届いた御老體、人間僅か五十年七十年は古來稀と申しますれば永い處がもう十年、我々共が討たいでも何時か一度は往生いたします」

「それでは何うでも殿様の思召を繼いで、仇討の心は無いと申すか」

「諄いお訊ね、何と仰せあればとて覺えない事は覺えないと……」内藏之助は慍う云つて跡を濁らした。

「手前が伺ひますのも恐れ入りますが、赤穂城にて御金配當の時に數多の金子をお預かりに成りましたのは、全く仇討に就ての御入用と存じました」およしは怕々ながら傍から口を入れた。

「黙れ、其方の知る處ではない、併しあれは那の時籠城致すとか仇討の入用だとか名を附けねば、大金をすり込む事が出来ぬわ、金が有りやこそ其金で榮耀が出来るのぢや、何も其方の知る處でない」と内藏之助は一言に退けた。

母は内藏之助の前へ躡り出て、
「何と云ふ心ぢや、此お方様へ申譯があるまいかの」と冷光院の御位牌を突附けた。
内藏之助は位牌を取つて庭へ投げ出した。

「アハ、老人の佛いぢり、殿様の御位牌が何と致した、譬へ母でも今日は内蔵之助の厄介者、無禮を致すと許さんぞ」

「己れ心に天魔が魅りしか、餘りと云へば情無い……」と、母は投出した位牌を拾ひ取つて顔に當て、暫時は物をも得云はず泣伏した。

「よし未だ居るか、早く出て行け」

「ハイ、畏まりました、然う仰せがございますならお別れを致します」

「吉千代も大三郎も連れて行け」

「ハイ、連れて行けと仰せられずとも連れて参ります、阿母様も私がお連れ申して豊岡の父の處へ参ります」と、およしは涙を拂つて云つた。

「ア、邪魔者は皆な連れて行つて呉れ」と、内蔵之助は嚙んで吐き出す様に云つた。

「阿母様、お泣き遊ばすな、旦那様はお氣が狂うて居られます故、何を申してもお

解りが御座いませぬ、今から豊岡へ御同道致します程に左様思召して下さいまし」

「よしや、お前が柔しくして下さるだけ却つて胸も痛めます」

と、此嘆きの中に内蔵之助は料紙を取寄せ手紙一通認め、寺坂吉右衛門を呼んで駕籠の用意をさせた。

襖の際に両手を仕へて始終を聞いて居た主税、其場へ出るにも出られず途方に暮れてゐる。

「サア、御老母、よしが同道すると云ふから早くお支度をしてお出でなさい」

母は涙の眼に主税を見付けた。

「コレ主税、お前は其處に居りながら何とも云はぬは何う云ふ心底、犬侍の内蔵之助の跡目を襲ぐ心底か」

「……………」

主税は何とも云へず突伏した。

「母上様、主税へ物を仰しやいますな、承はれば旦那様と二人して年も行かぬに鳥原遊び、實に我が子とは思ひません」と云つて、およしは屹として主税を睨んだ。

「豫て放蕩とは聞いたれど、此場に至つて只一言物も云はぬは不實者め」と、母は又しても老の眼に涙をハラ／＼と零した。

主税良金は胸に焼鐵當てられるが如く、齒を嚙緊めて凝と内藏之助の顔を見た。およしは吉千代大三郎二人の子供を奥から連れて來た。

「サア吉千代大三郎、彼處へ行つてお父上にお別れ申してお出でなさい、長々お世話に相成りました、唯今からは豊岡の祖父様の處へ、參ると申してお出でなさい」

母も傍から口を添へた。

「吉千代、父に能く申しなさい、犬侍の傍に居れば犬になります故豊岡へ參りま

すと云つてお出で」

「ハイ」と云つた吉千代は、弟大三郎の手を引いて内藏之助の前へ出た「父上様、長々御世話に相成りました、唯今より祖母様や母上様と一緒に豊岡の祖父様の處へ參ります、父上様にも御機嫌克くお居で遊ばせ」と云つて二人は兩手を突いた。

「オウ二人共豊岡へ行つたら、溫和しく能く手習學問を致すのぢやぞ、又祖父様の云ふ事を背いてはならん、大きくなつたら内藏之助同様に立派な武士に相成れよ」

「阿父様のやうになると、犬だと人に申されます」と、吉千代は内藏之助を見上げて云つた。

「また其んな事を申すか、併し浪人しても大石良雄、俸共が退散するに何品も遣はさんと人が申さう故、サア吉千代には此脇差をやる。大三郎には印籠を遣はす。此脇差は豊岡へ參つたら祖父様に御覽に入れるのだぞよ。祖母様や母に御世話を掛け

「るでないぞ」と、大丈夫の内蔵之助も、今は我が子の見納めと思へば堰き来る涙、其れさへ見せじと隠す胸の中は泣くより辛き武士の意地。其中に寺坂吉右衛門は旅の支度を整へて来た。

「それなら旦那様、もうお別れいたします」

と云つたが、およしは新らしく湧き来る涙を袂で拭つた。

「内蔵之助殿、もう對面はしません」と母の聲。

「ヤツ是は母上、立腹させて恐れ入ります」

「冷光院様のお位牌は此母が持つて参り、能く佛事は勤めまするぞ」

「エーッ然んなものは持つて行つて下さい。よしや、荷物は残らず船廻しにして跡から送るぞ、駕籠の者氣を附けて行けよ」と云つた儘、内蔵之助は再び横になつて

スヤ／＼寢入つて了つた。

吉右衛門は附添つて其儘山科の佗住居を出た。見送つた主税は耐へられずツツと泣き出した。

其聲に内蔵之助は起上つて二挺の駕籠を伏拜み、

「敵を欺く計略とは申しながら、現在母への悪口雑言其上ならず冷光院殿の御位牌を大地へ投打つ内蔵之助實に恐れ入りました。何れ泉下でお詫びを……」と後は言葉は出ればこそ、親子二人は泣き倒れて暫時は顔も得上げずに居た。

一方寺坂吉右衛門は宰領として駕籠に附添ひ、遠く但馬の豊岡へ無事に着した。

で一同は源吾兵衛に逢つて種々の物語をした。

此源吾兵衛は大石内蔵之助の心中は見抜いて居た。今に見よ、日本六十餘州の人手を打つて驚き且つ喜ぶ事最早近きにとありと、大層内蔵之助を賞めた。

敵の間者は大石が母及び妻子を遠ざけ、後へ遊女を身受けして入れやうと致した

連判狀破り

のを見て、流石に驚き呆れ、是では到底仇討の敵討のと云ふ事は全く世間の風説に過ぎないと見極めたから、早々江戸へ立歸つて其事を千阪兵部に復命した。

流石の千阪兵部も二度まで問者を遣はしたが、二度とも同じ様な返事だから、少しく油断はしたものの、併し却々以て氣を許せない、と思つたから吉良殿をば隠居させて、子息左兵衛殿を跡に直し、上野介を上杉家の領地米澤へ隠退させようと云ふ事にした。これが赤穂浪士から云へば、吉良を米澤へ遣つて了つたでは敵を討つ事が出来ない、今迄の苦心も水泡に歸せねばならぬ。

此事を早くも江戸表の吉田忠左衛門が探知したから、早々山科の大石の許へ申送つた。實は大石も既に問者が立去つた様子ゆゑ、東へ下向致さうと云ふ矢先、今は一刻も猶豫ならじと、是から東下りの仕度に取り掛り、愈々近日出立と事が極つた。

此時主税良金は内藏之助の前へ出て「さてお父上、私は是までに東へ下ること二

度、往復共東海道を通り、子供心にも東海道の様子はあられまし覺え居ります。然るに此度の旅は冥土の道中も同じこと、まだ中仙道の山家の景色を見ませんから、苦しからずば木曾路を江戸へ参りたう存じます」と願つた。

「フム左様か、其れでは其方は我等より早く中仙道を下るが宜い、供には衛門七を連れて参つたら宜からう、若し我等の方が早く江戸へ着したら、板橋驛まで出迎ひの者を遣はして置かう、江戸の着付先は日本橋石町の中村勘助宅であるから、左様心得るやうに……」内藏之助に云はれて主税は大に悦び、身支度を整へて衛門七と共に中仙道を江戸へ下つた。内藏之助は近衛公へ願を上げ、其身内人と成り御葉牡丹の割符を拜借し、道中先觸を頂戴して三十二人の者が大手を振つて江戸表へ出た。で馬喰町や小傳馬町に銘々を止宿させ、内藏之助は自身石町の中村勘助方へ落着いた。

主税衛門七は先に江戸へ到着して石町の中村方へ入つた。茲で一同顔が揃つたら、大石から廻状を廻して、是から高輪萬松山泉岳寺に於て七日の間亡君の大法會を催す事となり、一同黒の揃ひの紋付に袴、華やかな大小刀を帶し、雪駄穿きでこれ見よがしに佛參をした。心ある者はこれを見て、

「あゝ大石は見違へた男、名聞を好む白痴者で、甚だ無道千萬の横着者である」と笑つて居る。上杉の千阪兵部も片腹痛く心得て居た。

處が七日の法會を終つて内藏之助は、元禄十五年十二月十三日泉岳寺の奥座敷で評定をして種々打合せ、翌十四日の暮方に本所二ツ目の蕎麥屋楠屋源助方に會合し、夜中に松坂町の吉良邸へ闖入しようといふ手都合になつた。

南部坂雪の別れ

内藏之助以下四十七名が、高輪萬松山泉岳寺の評定が済んで、十三日の夕方に各自我が家へ立歸つた。愈々十四日の晩が討入と云ふので、僅か十四日一日が壽命である。で、其一日は知己親戚へ永別の手紙を送り、又兄弟姉妹へ生涯の離苦の情や親子夫婦の哀別の如きは、筆や言葉で盡されぬ程であつた。況して手紙も十四日の晩に出して、成るべく十五日の朝人手に届くやうに仕様と云ふのであるから骨が折れる。人の生命は知れない處で可いのだが、赤穂浪士は譬へ身體は壯健であつても公儀の罪に係り法律の罪人となるのだから、十四日の十二時までが生命である。

内藏之助は前に内匠頭長矩の御簾中様が、當時麻布南部坂の淺野式部少輔方に引取られて居る。此瑤泉院様へ一生の御袂別を致さねばならぬ。で中村勘助方で支度をして繼上下を着た時に、内藏之助ほどの者だがホロリと一零涙を浮べた。何故ならば麻上下は儀式的の物であつて、武士の祝儀不祝儀に着るものだから、平生は

南部坂雪の別れ

容易に着る時がない、これが一生の着納めだと思ふと、流石に器量人でも幾らか愚痴が出るものと見えて涙を流した。

で、寺坂吉右衛門を供に召連れて、十四日雪の霽間に麻布南部坂へ出て取次を願つた。

と、此時取次に出たのが、同じ義徒四十七士の内の一人小野寺十内の妹、戸田の局であつた。内藏之助の姿を見ると、先立つものは矢張り涙である。と云ふのは元禄時代の華奢男の風俗であるからで、元禄頃には粹人と云はれる者の身形は燈籠髪に癩病眉毛、腹切帯といふのが流行したものである。頭の毛を一本並べのやうに薄くして、甚だしきは頭の地へ蟲類を蝦切にして、表へ見え透くやうにしたものである。眞逆に内藏之助は蝦切までにはしなかつたが、矢張り然う云つたやうな工合に取繕つてあつた。

「あゝこれ迄の御辛苦……嘸亡君が泉下でお喜びになるであらう。戸田の局は先づ胸に浮んだ『併し城代家老ともあるべき身が、廊で云ふ幫間浮れ男の如き姿は、これも敵を欺く一つの手段、嘸お辛い事であらう』と先から先を案じるのが女の性質、ホロ／＼零れる涙を拭つて手を仕へた戸田の局」

「これは御城代様、能うこそお出でに御座ります、御機嫌の體を拜し、戸田大慶に存じまする」

「イヤ毎に變らぬ戸田殿の御様子、先以て悦ばしう存する、就ては御存知の如く、泉岳寺の法事も昨日にて相済みましたれば、第二の故郷なる山科表へ出立致しませんければ相成りません、依つて今日は早朝より參上致し、又暫らく出府の折も遠からうと心得ますれば、終日お物語を致す心組で參つてござります」と、内藏之助の云ふ顔を戸田の局は不思議さうに打守つて居たが、

「それでは御城代様、又山科へお歸りでございまするか」

「されば江戸に居ても別段御用もなき身は、仕方なく歸るより外に……」

「御城代様には其れでも済みませうなれど、御臺様が嘸御立腹でござりませう、御城代の御出府を指折り數へてお在でになつて、ヤレ嬉しや江戸へ來たかとお喜びの効もなく、唯此儘で再び故郷の山科へお出でになつては……マア御取次は致して見ませう」と、戸田の局は悄悄立つて奥へ行き、瑤泉院様へ内藏之助の來た趣を披露した。

「ナニ内藏之助が見えましたと……」瑤泉院は飛び立つばかりに胸を躍らした。

「早速目通り申附けまする」

「ハイ……」戸田の局は立つて内藏之助を誘つて來た。

瑤泉院は今年二十七歳、まだ失せやらぬ花の香の緑いや増す黒髪を根本から切拂

ひ、紫の紐を以てキリノくと巻かれ、薄紫の被布を着て水晶の珠數を手を持ち、梅の上に坐つて居る。

内藏之助は遙か末座に手を仕へた。

「内藏來ましたか近ぶ、久しう逢ひませんぞ」と、先づ御臺から口を切つた。

「ハ、ツ、有難き其仰せを承はりまして、内藏之助身に取り如何ばかりか大慶に存じ奉りまする、御臺様にも御機嫌克くお過し遊ばし恐悅を申上げ奉ります」

「内藏之助、其方へ早速相訊ぬるが、此度は江戸下向をして最久しうなると聞いてあるが、是迄一度も尋ねも致さず。今日この雪中を態々罷り越したのは大方暇乞ひに參つたのであらう、さすれば敵討の日も定まつたと見える。何時仇討を致しまするか、自らに申聞かせて喜ばせてたも」と幾ら惻發のやうでも矢張り女は女、流石に耐え兼ねて恚う聞いた。

これは道理千萬な話、内藏之助も折角これ迄来たのだから、今宵吉良の邸へ亂入して、御主君の御無念を相續致しますと申上げたいは山々であるが、上杉家には智者も多いこと、若し此お館にまでも間者が入つた節には、百日の説法何とやらである。と云つて人拂ひをしては尙更ら怪しまれる。これは何うしたら宜からうと流石の内藏之助も一寸お答へに困つたが、謀計は密なるを以て好しとするの譬、これは一層御臺様まで欺くのが一計である。譬へ一日半日たりとも君を欺くは不忠の極であるが、明日になれば詳しく知れる事と終に決心をした。

「これは思ひ掛けなきお尋ねに預り内藏之助甚だ迷惑仕ります。拙者も暫らくは都山科に住居致して居りましたが、今般泉岳寺法事の爲め江戸表へ下向して、七日の間施行仕り、愈々昨日にて相済みましたれば、近日の内に又々山科へ罷り歸りまする心底、今日はそのお暇乞に罷り出でましたるのみ、亡君の仇討などは

思ひも寄らぬ儀にござりますれば、従つて其日なども決して居りませぬ、尤も赤穂を退散致しまするまでは仇討の決心もあり、又是に志を同じう致した者も御座りましたが、日に月に變心致す者ばかり、只今の處では物の十人も同意して呉れる者もありませぬ、それに引替へて吉良殿は上杉といふ大家を後楯と致して居りますれば、高の知れたる瘦浪人の五人や十人如何に苦心を致せばとて仇討は愚か塀一重をも乗越える事すら容易なものではござりませぬ、それ故亡き殿様に對しては恐れ入りまするが、生涯二君に仕へぬを以て切てものお詫びと致し、拙者は山科の田舎侍と云はれ、朝夕を送りまする心底、何卒左様のお訊ねは重ねて御無用に願ひます」
「内藏之助其方は何と申す、女のこと故一大事を明かす事はならんと云ふ堅き約束があつての事とは思へども自らも淺野内匠頭の内室、決して他言などは致しませぬぞ、また是に居る女共は皆自らを勞り呉れる忠義者ばかり、決して洩れる氣遣ひない、

どうぞ仇討の當日を明して安心させてたも、これ内蔵之助、この通り手を合せて頼みまする」と、勿體なくも梅を迂り出て手を合せる。内蔵之助は五臓六腑を扶られるよりも辛い思ひ。心で泣いて顔で笑ひ、

「アイヤ如何程仰せられましたも覺えのなき事は飽までも存じませぬ。又殿様が殿中にて御場所柄も忘れて御刃傷なされましたのは、これ御短慮と申すもの、承はれば其前夜神崎與五郎が死を以てお諫め申上げたる時に、譬へ如何なる恥辱を受けやうとも、家の爲め家來の爲め決して短慮は致さぬと堅き御誓言を遊ばしながら、其場に至つて吉良殿が如何に無禮があつたとて、僅か一日の事にして御刃傷をなさるとは實に笑ふに堪へた致方、申さば此方が悪いので少しも吉良殿を怨む譯はござらぬ。殊に吉良殿はもう老耄の身の上なれば、我々が苦心して殺さずとも、定業限りあるものでござりますれば、今に死ぬるに相違ござりませぬ。それも五人や十人です

仇討に罷り出で、首尾克く仕終はせれば宜けれども、仕損ずるやうな事があつた時は一命を捨てた上に諸藩の嗤ひを招き、殿様の恥辱を再び世に弘めまするやうなもの、其れ故仇討なぞと申す事は決して仕りませぬ心底、御臺様にも何卒左様思召して下さりまする様」

恚う云つて内蔵之助は顔を反向けた。瑤泉院は怒りの面色にて、

「これまだ左様な事を申すか、愛宕下田村邸にて殿様御切腹の際、堀部安兵衛に仰せ附けられ、其時御舎弟の大學殿や自らには何一言の御遺言もなく、只其方のみに呉々と仰せられた御遺言、御肉通しの御短刀まで拜領致した其方ではないか、只今になつて左様な事を申すは自らを欺くに相違ない、必ず人には語らぬ故、どうぞ大事を明してたべ」と擬と内蔵之助を見据ゑる。

「これは思ひの外のお訊ね、何遍申さるゝも同じ事、怨みこそあれ殿様の御無念を

南部坂雪の別れ

晴すなぞとは思ひも寄らぬ儀でござる」内蔵之助はキツパリ答へた。

「フム、さらば何うあつても仇を討つ所存はないと申すのか」と瑤泉院は側にあつた冷光院殿の御位牌を取つて内蔵之助の前に差出し「これ内蔵之助、只今の其方の言葉、今一度この御位牌の前で申して見よ」と云つてハラ／＼と落涙する。呵鼻叫喚の苦みにも勝る御臺の言葉に、内蔵之助は五臟六腑を絞らるゝ思ひ、併し斯くてはならぬと心を勵まして、

「別に申上げやうは御座りませぬ。殿様一日の御勘忍さへ遊ばせば千五百石の家を満足してあるものを、僅かの間に浪人して其日の生計の辛苦を致すのも全く殿の思召し違ひからでござります、又殿様も御短慮をなされば御切腹にも及ばず、この大石も浪人は致さず安泰に居られます、されば殿様にお怨みをこそ申せ何で敵が討てませう、これは諺に申す自業自得、別段御氣の毒とは存じませぬ」と飽くまで強

い事を云つてせ、ラ笑つた心の中、察するだに實に哀れである。瑤泉院はハラ／＼と落涙して、

「ア、飛んだ目違ひをしました。殿様が大石を斯程の不忠者と思召さば、お肉通しの御短刀や御辭世の御短冊までもお遣はしになるまいものを、エ、見下け果てたる犬侍、目通り成らん立ちませえ」と怒りの聲を振絞る中に、持病の癩氣に籠ぢられて苦む様子、戸田の局は驚いて御介抱申上げる。

「あの御城代様、この通り上がお苦み遊ばすのも全く貴方の仰しやり方が餘りお強いからでございます、何うぞ仇討の思召が無くとも、何月何日は仇討をするや仰しやつて下されば、必ずお癩は静まります。何卒然う仰せ上げて下さい」と、戸田の局は泣かんばかりに云ふ。内蔵之助は恚う云はれないでも、此有様を目の前に見ては、實に腸を断たれるやうな思ひ、一層これ／＼と打明けようかと思つたが、イヤ

「イヤ爰が……と思ひ直して、

「仇討の心の無いものが、何で左様な事が申されませう、御免下されい」

「飽までも云ひ張つて其場を立つた内蔵之助、一間を出ると、襖趣しに両手を合せ

て「何卒今宵一夜の御辛抱を……」と心の中に云つてハラ／＼と落涙した。

戸田の局は漸う御臺を静めて、内蔵之助の後を追つて襖を出ると、立去つたと思

つた大石が涙顔で突立つて居るから不審に思つて逡巡した。内蔵之助もハツとして

「イヤ戸田殿、えらい御迷惑を掛けて濟まんでござつた。それでは又重ねて御意を

得る時節も御座らう」と、何氣なく顔を反向け徐々と玄關の方へ立去つた。

「ア、若し御城代様」

戸田の局は追ひ絶つて呼止めた「甚だ恐れ入りましたが、些とお訊ね申上げたき儀が御座いますれば、何うか一間へお出で下さります様お願い申上げ

ます」

「内蔵之助は又何か難題でも持出すのではないかと胸を痛めながら、戸田の局の後

に従つて一間に入つた。

「さて御城代様、只今御臺様の前にて仰せられました事は、定めし偽りでござりま

せうな。御臺様の前には多くの女中も居りますれば、其れで故と那の様に仰せられ

たので御座りませう。此部屋は誰も外に聞く者も居りませぬゆゑ、何卒仇討の手筈

等お物語り下さるよう、さすれば私より御臺様に御直々に申上げ、御安堵遊ばすや

うに計らひませう」と、戸田は誠忠面に現はして云つた。

内蔵之助は首を掉つて、

「コレ／＼戸田殿何を仰しやる、仇討などは全く身に覚えのない事、最前も御臺様の御前にて左様申したではござらぬか、そのお訊ねは最う御無用になされい」と

南部坂雪の別れ

云ひながら立掛つた。戸田は慌て、袂を押へながら、

「左様なればもう何事もお伺ひは仕りませぬ。が、只一つお伺ひ申上げたきは外の事でも御座りませぬ、昨年御家の大變と共に別れました兄の十内や弟の幸右衛門は其後トシと行方が知れませぬ、如何に暮して居りませうや、文の便りもござりませぬば生死の程も分り兼ね、それ故心痛致して居ります。若し又兄や弟の居ります處を御存知でござりますれば、何卒お教へ下されるやうお願い申上げます」

これを聞いた大石は、ア、氣の毒な事だ、その御心配は尤もである、なれど小野寺十内や弟の幸右衛門は今宵本所松坂町の吉良邸へ仇討に參ると云つてやりたいは山々だが、然うも成らぬ今の場合、

「ア、何事かと存じたら十内や幸右衛門の居所が知れぬに依つて、聞かせて呉れと申さるゝか」

慇懃云つて内藏之助は又も座に就いた。

「左様でござります」

「それは易い事、兄の十内は當時京都祇園町と申す處で繁昌を致して居る」

戸田の顔は急に曇つた「あの祇園町と申す處は、遊女の居ります町ではござりませぬか」と心配氣に訊ねる。

「されば其色街でござる」

「何で左様な不淨な處に住居を致して居ります」と戸田は押返して訊く。

「アハ、十内はその祇園町で幫間を致して居らるゝのだ」

「幫間とは、矢張り調練の太鼓でも持ちまする役で……」

「これはしたり戸田殿、調練の太鼓を持つのではござらぬ、幫間と申すのは人の腕弄になる身體、早く申せば男藝者でござる。十内踊れと云へば踊らねばならず、唄

へと云へば濁聲でも歌を唄ひ、藝妓やおやまの供をして其日を送る浮れ商賣處が十内も踊りが上手になつた。就中て裸踊といつたら今祇園町で外に眞似するものもない位ぢや」と、内蔵之助は眞顔に云ふ。戸田の局は赤面して、

「もう兄の事は承はりません、武士たる者が如何に浪々致したればとて、男藝者に成るとは實に見下け果てたる心底……シテ弟の幸右衛門は當時何處に居りまする」

「幸右衛門は大阪の堂島と申す處に居らるゝ」

「何を致して居りまする」

「されば、幸右衛門は車力を致して居る」

「車力と申しますと、何う云ふ勤向きを致すのでござりまする」

「イヤ別に勤めはない朝から晩まで仕事があれば大八車の轆棒を掴んで、エンサカホイと掛聲を致し、大きな荷物を運搬するのぢや」と口から出任せの嘘八百。何う

で今宵一夜を過せば何も彼も分ること、内蔵之助は心で泣いて慙う云つた。戸田の局は餘りの事に其場に泣き倒れた。

「さらば戸田殿、これでお暇申す……」

内蔵之助は立上りながら懐中から取出した連判状「これは山科にありし時殿上人と交はつて能く和歌の會へ出席いたし、その節詠んだ腰折歌、お土産もなければ是を差上げようと存じたが、上のお積で差上げる事も叶はぬ。何卒お積の静まつた時に差上げて下さるよう」と、服紗包の儘緊乎と戸田に手渡した。で、其儘玄關から御門を出た内蔵之助、口には種々の拵へ事を云つて仇討の所存無きもの、如くに装うたが、今宵は吉良の屋敷に討入るのであるから、決して瑤泉院様の御機嫌を損じたい事はない。が、これも已を得ぬ手段であると、幸ひ四邊に人の居ないのを見て御門の地幅に両手を突き、

「ハ、ッ、今宵に迫つた仇討の次第を詳しく申上げ、上の御心を休め奉らんと存じ推参致したれども、思ふ仔細も御座りましたに依つて故と其所存なき態を粧ひ、上のお腹立を被りし不忠の段は何卒お許し下さるよう、此大石が不忠不義、犬畜生にも劣つた武士と、世のあざけりを受くるのも今宵限り、明日からは殿の御無念も晴るれば此大石の身に被りし冤も霽るゝ次第、何卒お許し下さるよう」と涙を流してお詫び申上げる。後に控へた寺坂吉右衛門も雪の中に両手を突き、お暇乞ひをして共に兩國矢の倉の堀部彌兵衛金丸の宅へ歸つた。

瑤泉院はなかく瘡が治まらなかつたが、戸田の局の介抱で漸くスヤ／＼と御寢になつた。戸田はお暇を賜はつて我が部屋に退る。お廊下を歩きながらも、先刻大石が云つた兄の十内や、弟の幸右衛門の事を氣にして却々胸が落付かない。ヤツと部屋に入ると紅梅と云ふ女中がコクリ／＼と居睡りをして居た。

「コレ紅梅」と戸田は聲を掛けた。

「おや旦那様、お下りでございましたか」紅梅は慌て、居坐を直しながら「飛んだ失禮を致しました、眞平御免下さりませ」と挨拶をする。

「イヤ／＼別に咎めは致しませぬ、平日よりは刻限も遅し、眠氣のさすは無理ではありませぬ」

「恐れ入りました、旦那様のやうに仰しやつて下さいますと、却つて痛み入りまする、さうして大層お遅いお下りでございました」

「今日は城代家老の大石内蔵之助といふお方が、久々にて御機嫌伺ひに参つたので御殿でのお物語や何や彼で、大層下りの時刻が遅なりました」

「あの赤穂の御城代大石様がお見えになりましたので御座いますか」と、紅梅の顔は何やら輝いた。

「コレ紅梅、其方はよく大石様を存じて居るの」戸田の局は不審顔に訊ねる。

「イ、エ、これは人傳に伺つたのでございます、大石様は器量勝れたお方であるといふ事を……」紅梅は無難作に云つてのけた。

「何の大石様が器量人なぞとは世間の人達が買被つての噂、實を申せば武士の風上にも置けぬやうな大武士、それ故上にもお腹立ち遊ばして、御癪氣が起つたくらる」と戸田の局は、先刻を思ひ出して怨み言を云ふ。

「左様でございまするか、あの旦那様、丁度お寝衣がよい工合に温まつて居りますれば、お召替へ遊ばしたら如何で御座います」

「お、然うしませう」

戸田の局は頷いて立上つた。紅梅は後ろに廻つて寝衣を持つて居る。と此時戸田の局が帯を解くと紫の服紗包がバツタリ落ちた。紅梅は拾ひ取つて、

「旦那様、あの只今これが落ちまして御座いますが、これは何でござりますか」

「お、それは今云つた大石殿が山科からのお土産といつて持つて参つた品ぢやが御前様の御癪氣ゆる其れで私が預かつて居るもの、何れ明日にでもなつたら上の御覽に入れようと思つて居ます。併し大方は上に於ても御手にする氣遣ひばあるまい」

「左様なれば那の大石様がお持ちになつた品で御座りますか」紅梅の眼は異様に輝いた。

「それは其用筆筒の上の抽斗に入れて置いてたもれ」

「畏まりました」

紅梅は服紗包を用筆筒に仕舞つて「左様ならば旦那様、お寝み遊ばしませ」と挨拶して次の間に退つた。

戸田の局は先刻大石が犬にも劣つた事を云つたので誠の事と思ひ、一味の義士四

十七人が誓紙血判をした大事な連判状とは心附かず、只の歌でも書いてあるものと軽々しく思つたから、自分では仕舞はずに紅梅に吩咐けたのだが、日頃は俐巧のやうでも其處が女、大石を犬侍だと思つて腹が立つて居るから外の事には氣が廻らない。氣色悪げに寢床へ入つたが寢付かれない。その筈である、兄の小野寺十内や弟の幸右衛門、其血肉を分けた兄弟が今は吉良邸へ討入つて、血汐の滴る太刀を振冠つて當るを幸ひ薙ぎ倒すといふ目覺ましい働きをして居る最中だ。暫らくモヂモヂして居る内に何やら怪しい物音が耳に響いた。密と様子を窺ふと襖の外でミシリ／＼と云ふ人の忍び足。する内に襖をソツと明けて入つて来たのは、手拭で面を包んだ一人の曲者、戸田の側を通つて用筆筒の方へ行つたが、金戸棚へは手も掛かず最前大石から受取つた土産の品を掴み出し、それを懐中して其儘部屋を抜け出ようとした。

戸田は曲者の隙を窺ひ、ヤツと云つて足を拂つたからバツタリ倒れた。直に馬乗に跨がつて、有合はした腰帶で確乎と縛し付け、被つた手拭を取つて見ると驚いた。驚いたのも無理はない、自分の召使の紅梅であつた。

「おやッ其方は……何故恁んな事を致すのぢや」

「旦那様誠に恐れ入りました。どうぞお助け下さいませ、實は今日親共から哀れな手紙が参りました、其れを助けたらば分かりに、朝夕御恩を受けながら旦那様の目を眩ませ、金を盗んで親許へ送らうと致しました、どうぞお助け下さりませ」と紅梅は打惚れた風で云ふ。

「黙れ紅梅、左様な哀れさうな話をして此戸田を欺かうとは不埒な女、金が欲しくは何時でも留守を致す其方、今夜に限る事はあるまい。又金の在所を知りながら金戸棚へは手も掛けず、内蔵之助殿が置いて行かれた此品へ心を掛ける上からは、吉